

宮崎市文化財調査報告書 第75集

みやざきじょうあと

宮崎城跡

そくりょうちょうさほうこくしょ

測量調査報告書



2009

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第 75 集

宮崎城跡測量調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
6	10	南西にある奈古山	南東にある奈古山
8	17	城の南西部一帯にあたり	城の南東部一帯にあたり

宮崎市文化財調査報告書 第75集

み や ざ き じ ょ う あ と

宮 崎 城 跡

そ くり ょ う ち ょ う さ ほ う こ く し ょ

測 量 調 査 報 告 書

2 0 0 9

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

宮崎城は、市街地の北端、大淀川を臨む山の上に築かれた戦国時代の大型山城です。宮崎の名を冠する城であり、本県を代表する城であっても不思議ではありませんが、残念ながら、市内においてすら、その認知度は今ひとつです。いわゆる城の普遍的なイメージである天守閣や石垣を持たない、山城であることも一因でしょう。無論、大きな天守閣のそびえる壮麗なお城は、我が国における建築物の代表的な存在であり、魅力的です。対して、宮崎城のような山城は、人目をそばだてるような建築物もなく、一見、普通の山にしか見えないため、見劣りする感のあることは否めません。しかし、山を削り、土を盛って様々な工夫を凝らした山城は、動乱の時代、自然の地形を巧みに利用して生き抜こうとした当時の人々の力強さと、現在の我々が拠って立つ歴史を築いてきた先祖の存在を、よりまざまざと感ずることが出来ます。その一方で、宮崎城の城主であった上井覚兼のある日の日記には、「終日御酒・御茶などにて四方山之物語共也」とあり、戦いの合間には戦国武将も今の我々と同じく余暇を楽しんでいたことがわかり、親近感を覚えます。

宮崎城は、「池内宮崎城クラブ」をはじめとした地域の方々の熱心な活動によって守られ、顕彰されてきました。これから、我々行政の立場に立つものが、地域の方々とともに、どのような保存、活用を行っていくのか、十分に検討せねばなりません。本書は、その端緒である基礎資料整備の一環として刊行するものです。本書が歴史研究の一助となることを願うとともに、その保存、活用のあり方について、様々なご意見、ご教示を頂ければ幸いです。

平成21年3月

宮崎市教育委員会
教育長 田原 健二

例 言

1. 本書は宮崎市教育委員会が平成12年から19年にかけて実施した宮崎城跡の測量調査報告書である。
2. 平成12・13年度、千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館助教授 当時）に依頼し、縄張り図の作成を行った。平成16～19年度、現地における地形測量を行った。

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

〈平成19年度以前〉

〈平成20年度〉

調査総括	文化振興課長	小掠 聖 野田 清孝	文化財課長	小掠 聖
	文化財係長	永井 淳生 田村 泰彦 米良 明信 山田 典嗣	埋蔵文化財係長	山田 典嗣
調査事務	主任主事	今井 智美 松木 勇道 鳥枝 誠 吉永 大介	主任主事	松崎 留美
調査担当	主任技師	宇田川美和 藤木 晶子	主任技師	竹中 克繁
	技師	石村 友規		

調査指導 千田 嘉博（国立歴史民俗博物館・奈良大学）・坂井 秀弥（文化庁）

4. 「第IV章宮崎城の構造」は、平成12・13年度事業において千田嘉博氏に依頼し、作成していただいた報文及び図面を掲載したものである。
5. 上記第IV章以外の掲載図面の作成は、宇田川、藤木、竹中、石村が行った。同じく第IV章以外の執筆は竹中が行った。
6. 本書の編集は竹中が行った。
7. 掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第I章 宮崎城の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第II章 宮崎城の沿革	
第1節 宮崎城略史	4
第2節 記録に見る宮崎城	5
第III章 宮崎城周辺の地名	8
第IV章 宮崎城の構成	
第1節 立地と歴史的背景	10
第2節 宮崎城からの眺望シミュレーション	11
第3節 宮崎城の構造	12
第4節 『上井覚兼日記』に見る宮崎城	23
第V章 宮崎城の現況	29

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	3
第2図 宮崎城要図	4
第3図 宮崎城縄張図	6
第4図 宮崎城周辺の小字名	9
第5図 宮崎城からの可視範囲	12
第6図 宮崎城縄張図	15
第7図 宮崎城現況地形測量図	30

表目次

表1 周辺遺跡一覧	2
-----------	---

第 I 章 宮崎城の位置と環境

第 1 節 地理的環境

宮崎城は、宮崎県の海岸部に広がる宮崎平野南半部のほぼ中央に位置する。広義の宮崎平野は、宮崎県の北部に位置する日向市の南部を東流する耳川付近から、県央の宮崎市南部の木花付近までの海岸線と、上記 2ヶ所から内陸側の宮崎県野尻町付近まで伸びる丘陵縁辺とを結んだ約 800km²の三角形の範囲を言う。宮崎平野はその中央を一ツ瀬川が東流し、一ツ瀬川の両岸には低丘陵が海岸部に向けて張り出しているため、南北に分断されたような形になっている。細かく見れば、当然ながら、平野内においても丘陵、台地等による地形の起伏があり、内陸丘陵地帯から張り出した標高 100m 未満の丘陵が、水田地帯となる狭義の海岸平野部の縁辺を形成している。この低丘陵の縁辺には多数の山城が築かれており、宮崎城もまた、平野部を見渡せる、丘陵縁辺部に位置している。宮崎平野を流れる河川のうち最大のもは宮崎市のほぼ中央を東流する大淀川であるが、この大淀川は下流において一旦、直角に近く流れを変えて南流し、のち、再び東へと流れを変えて河口へと至る。宮崎城は、大淀川が南へと流れを変えるいわゆる川曲の地点の左岸丘陵上に位置し、河川利用に適した環境にある。平野部に向けて突き出した 3本の尾根の中央の尾根に位置するため、両脇を別の丘陵で遮られるような形になるが、南東方向の眺望は開け、海岸平野の南端までを一望できる。

第 2 節 歴史的環境

宮崎城周辺は市内でも有数の遺跡集中地帯で、宮崎城ののる丘陵基部には旧石器時代の遺跡が集中して存在し、丘陵斜面には古墳時代の横穴墓群が、丘陵先端の台地部には旧石器時代から近世までの複合遺跡である「下北方遺跡群」が所在する。

丘陵基部には、「垂水第 1 遺跡」「垂水第 2 遺跡」「垂水公園遺跡」「金剛寺原第 1 遺跡」「金剛寺原第 2 遺跡」「小原山第 1 遺跡」「小原山第 2 遺跡」等、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多数所在している。宮崎城ののる丘陵とは迫を挟んで西向かいに位置する丘陵先端には、濱田耕作によって調査が行われ、縄文時代早期における柏田式土器の標識遺跡となっている「柏田貝塚」があり、この柏田貝塚と大淀川を挟んで対岸に位置する跡江丘陵上には「跡江貝塚」が存在する。

弥生時代においては土坑墓群が検出された丘陵頂部の「垂水公園遺跡」や、絵画土器を出土し、前期と後期の二度に渡って営まれた環濠集落である下北方遺跡群中の「下郷遺跡」などがある。また下北方台地に接した低地中には、鋤、鋤等の木器が検出された「垣下遺跡」が所在する。

古墳時代においては下北方遺跡群中に「下北方古墳群」があり、中期から後期にかけて営まれた、前方後円墳 4 基を含む 16 基の古墳と、金銅製装身具や甲冑、鉄剣、鏡等多彩な副葬品を出土した地下式横穴第 5 号をはじめとする、南九州に特徴的な地下式横穴墓群が混在する。下北

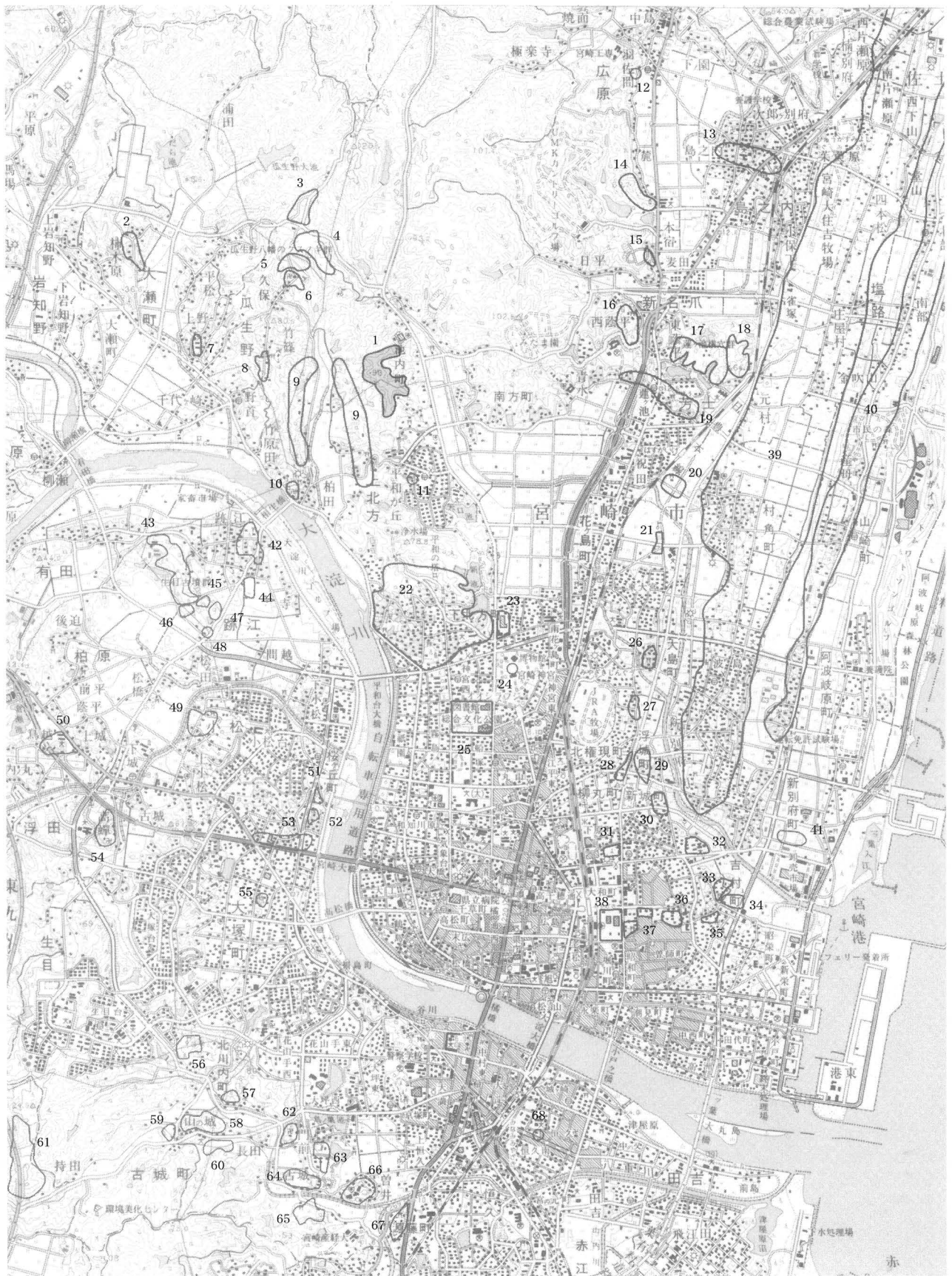
方遺跡群中には、他に竈付きの竪穴住居を検出した「下郷第4遺跡」があり、台地上における墓域と居住域との関係において注目される。また下北方台地と大淀川を挟んで対岸に位置する跡江台地上には、100m級前方後円墳3基を含む前期を中心とした大古墳群「生目古墳群」があり、さらに宮崎城ののる丘陵の斜面一帯には、「池内横穴墓群」と「瓜生野横穴墓群」が分布する。

現在までに確認されている古代以降の遺跡は多くはないが、先述の「下郷第4遺跡」では、竪穴住居とともに大型柱穴列や須恵器研が検出されている。更に下北方台地上では、表面採集、発掘調査により、斜格子叩きの布目瓦が広範囲にわたって得られており、古代寺院か官衙関連遺跡の存在がうかがわれる。また宮崎城から東方に位置する新名爪の「北ヶ迫遺跡」では、溝中より円面硯が出土しており、古代那珂郡衙の比定候補地となっている。

中世においては、宮崎城とは迫を挟んで西側の丘陵上に「竹篠城」があり、大淀川を挟んだ南側対岸の跡江丘陵には「跡江城」がある。これらは宮崎城から目視できる存在であり、距離も近接するが、いずれも未調査であり、築城時期等不明である。その他、宮崎城から4km圏内には、「倉岡城」「丹後城」「新名爪地区城館跡」「島之内・広原地区城館跡」等、多数の山城が存在する。また拠点城郭としては、宮崎平野北端には佐土原城、南端には柴州崎城が位置している。江戸時代には、一帯は延岡藩の飛び領となり、下北方台地の南端に、代官所が置かれた。

表1 周辺遺跡一覧（番号は第1図に対応）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	宮崎城跡	19	住吉横穴墓群	37	宮脇遺跡	55	蓬莱山城跡
2	柿木原地下式横穴墓群	20	地藏牟田遺跡	38	浄土江遺跡	56	内野々第3遺跡
3	垂水第1遺跡	21	桜町遺跡	39	第1砂堤上遺跡群	57	中岡遺跡
4	垂水第2遺跡	22	下北方遺跡群	40	第2砂堤上遺跡群	58	山城跡
5	小原山遺跡	23	垣下遺跡	41	池開・江口遺跡	59	山城遺跡
6	今城跡	24	船塚古墳	42	大屋敷遺跡	60	九拾田遺跡
7	瓜生野小学校校庭遺跡	25	船塚遺跡	43	生目古墳群	61	本城跡
8	竹篠城跡	26	本村遺跡	44	堂原遺跡	62	門前遺跡
9	瓜生野横穴墓群	27	立野遺跡	45	石ノ迫第2遺跡	63	古城遺跡
10	柏田貝塚	28	権現町遺跡	46	石ノ迫遺跡	64	古城跡
11	池内横穴墓群	29	浮ノ城遺跡	47	跡江城跡	65	下古城遺跡
12	広原横穴墓	30	中無田遺跡	48	跡江貝塚	66	曾井城跡
13	住吉古墳群	31	庵ノ山遺跡	49	平石遺跡	67	源藤遺跡
14	島之内・広原城館跡	32	憶小学校遺跡	50	石塚城跡	68	赤江町古墳
15	北ヶ迫遺跡	33	北中遺跡	51	竹之下遺跡		
16	新名爪城館跡	34	柿本遺跡	52	多宝寺遺跡		
17	蓮ヶ池横穴墓群	35	北中第2遺跡	53	大淀古墳群		
18	丹後城跡	36	大町遺跡	54	高蟬城跡		



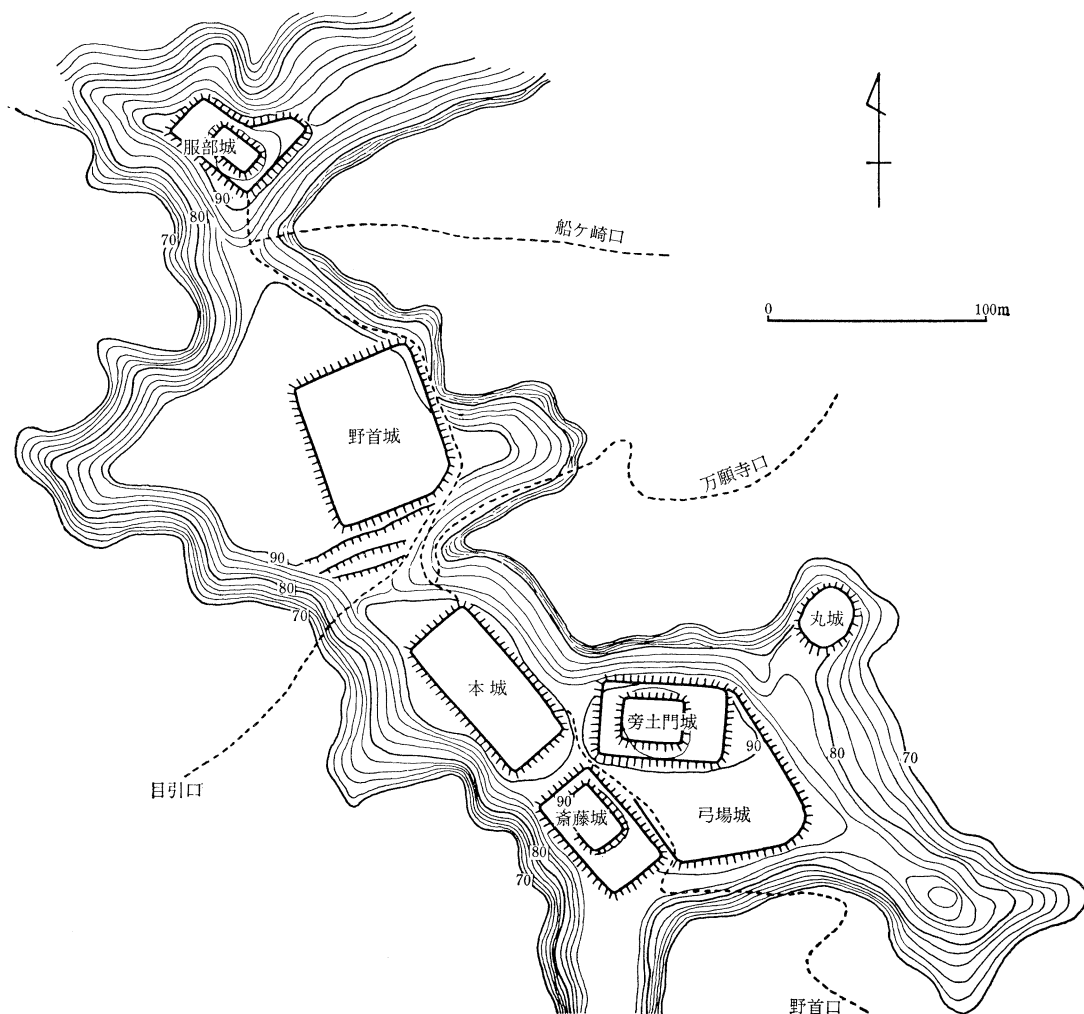
第1図 周辺遺跡位置図 (Scale : 1 / 60,000 ※天が北)

第Ⅱ章 宮崎城の沿革

第1節 宮崎城略史

宮崎城は別名「池内城」「目引城（目曳城）」「龍峯城」「馬索城」とも言う。記録における初出は、『日向記』『土持文書』における建武3年（1336年）、南朝方の凶師随円・慈円親子（ないし兄弟）が池内城（宮崎城）に拠り、北朝方の土持宣栄に攻められ、敗死したとの記事である。戦国期には、宮崎平野の支配権を巡って伊東氏と島津氏の争いが繰返され、平野部の要衝である宮崎城も、多くその争いの舞台となった。

文安元年（1446年）、伊東祐堯が県伊東氏の領有していた宮崎城を落とし、落合彦左衛門が城主となった。その後、1577年までの130年間、宮崎城は伊東氏が領有した。天文3年（1534年）、伊東氏の家督争いが起こり、長倉能登守に擁された伊東祐吉が宮崎城に入り、家督を継承した。天文5年（1536年）、祐吉は宮崎城で死去し、翌天文6年（1537年）、祐吉の兄義祐が家督を相続し、宮崎城に入った。天文10年（1541年）、長倉能登守が島津忠広と手を組んで叛旗を翻したが、義祐によって鎮圧されている。その後、義祐は日向全土を支配し、天文23年（1554年）、都



第2図 宮崎城要図（石川 1980 より転載）

於郡城（西都市）へと移った。伊東氏が日向支配を行った期間、伊東氏が領していた城を俗に伊東氏48城と言ひ、宮崎城もその一つに数えられる。

元龜2年（1572年）、木崎原の合戦で伊東氏は島津氏に大敗し、続く耳川の合戦において、日向全域の支配権は島津氏へと移った（伊東氏の豊後落ち）。天正8年（1580年）、島津家の老中職にあった上井伊勢守覚兼が宮崎城に入り、以後、天正15年（1587年）の豊臣秀吉による九州仕置まで、覚兼は佐土原城主島津家久を補佐し、日向支配を統括した。覚兼自身の手による『上井覚兼日記』（大日本古記録）には、この間の城内での生活が詳細に記されている。

天正15年（1587年）、豊臣秀吉の九州征伐の際、一時期、伊東祐兵が宮崎城に入ったが、祐兵は飢肥（日南市）を知行することとなり、宮崎は縣（延岡）の高橋元種領となり、権藤種盛が宮崎4万石の地頭として、城代を務めた。慶長5年（1600年）9月29日、関ヶ原合戦の余波により、清武城主稲津掃部助の軍勢が攻め寄せ、権藤種盛は自刃（降伏を容れられず、討ち取られたとも言う）、宮崎城は落城した。その後、一時期、稲津掃部助が宮崎城に入り、各地で島津勢との間に小競り合いを続けていた。これは、東軍方の伊東氏の家臣である稲津掃部助が、当初、西軍に属していた高橋氏が東軍方に寝返っていたことを知らずに起こった同士討ちであり、その責任を取らされる意味もあって、慶長7年（1602年）、稲津掃部助は主家から誅戮されている。宮崎城は、慶長6年（1601年）、徳川氏の指示により、伊東氏から高橋氏に返還された。

慶長18年（1613年）、延岡領主高橋氏が改易され、翌、慶長19年（1614年）、肥前から延岡に転封された有馬直純が宮崎も領有することとなったが、元和元年（1615年）の一国一城令により、宮崎城は廃城となった。

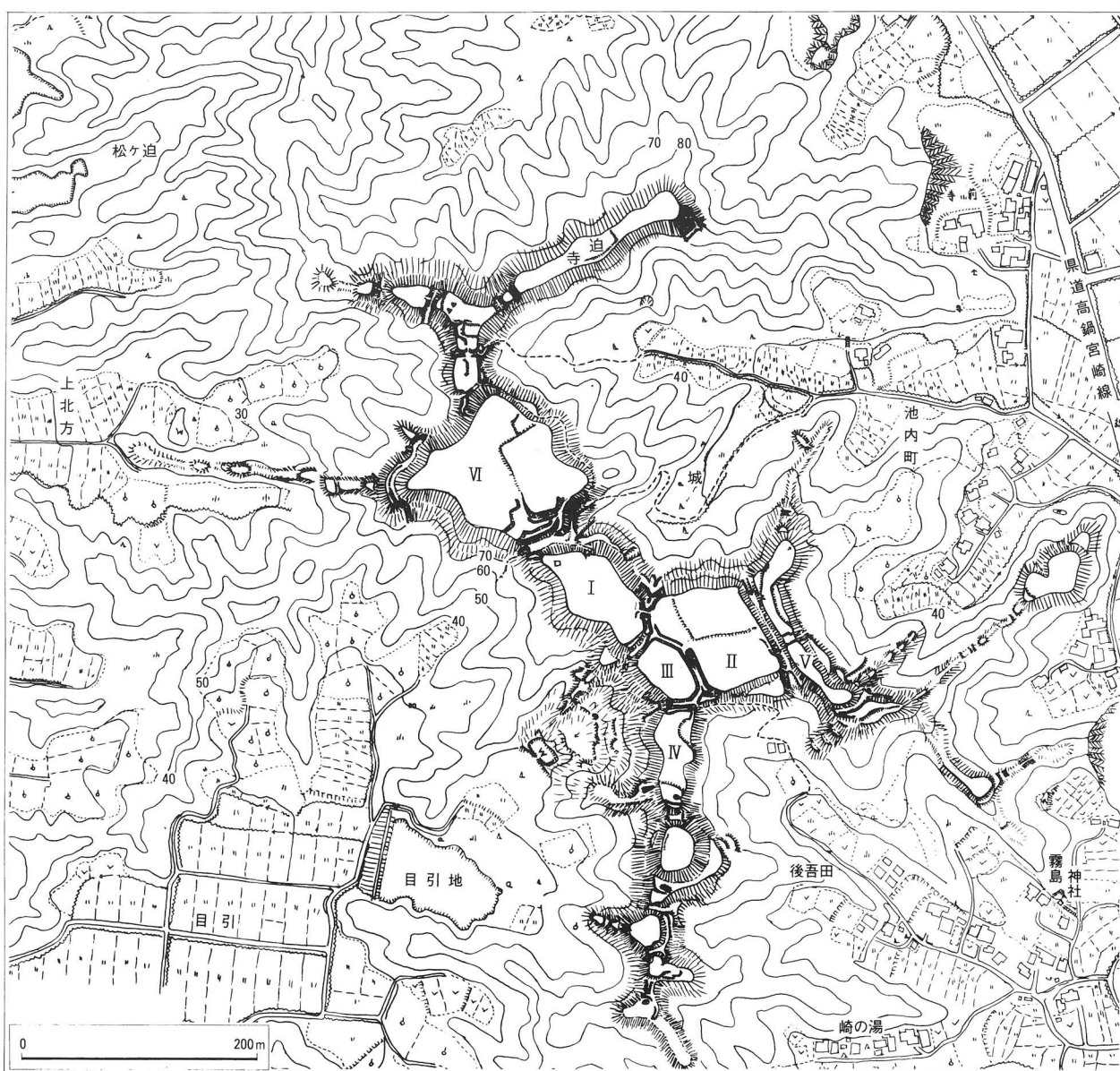
第2節 記録に見る宮崎城

宮崎城に関する記録、記述のうち、最大のものは、島津時代の城主であった上井覚兼の手による『上井覚兼日記』である。『上井覚兼日記』は天正2年（1574年）から天正14年（1586年）、覚兼が29歳から41歳の間にかかれた詳細な日記であり、当時の武家社会における習俗を知る一級史料として高く評価されている。その記載は政治・軍事・経済・宗教・文芸等多岐にわたり、天正8年（1580年）に宮崎城主となって以降の記事でも、宮崎衆を率いての肥前、肥後、豊後への遠征や、折生迫湊の寄船検分、鉄砲、兵船造り、長曾我部元親ら他大名との通信などの公人としての活動や、茶会の開催、戦記の朗読、連歌の添削、住民たちの盆踊りや芝居の見物、和歌、俳諧、四半的、将棋、双六、蹴鞠、香、鶯合わせなどの私人としての覚兼、満願寺、奈古神社をはじめとする寺社への参拝や僧、宮司との交流、島津義久の病氣平癒のための祈祷などの信仰面についてなど、当時の武将の様々な面を知ることができる。その中で、宮崎城の作事に関しては天正11年（1583年）に毘沙門堂の建立、弓場の普請、柏田間の道普請、天正13年（1585年）に柏田口の普請、天正14年（1586年）に金丸口の普請などの記事があり、他に茶室や湯殿、庭園の存在もわかる。また登城口として柏田口、金丸口、和田口、目曳口が記載され、覚兼の側近20人程が「城内之衆」として、覚兼とともに、城内に屋敷を構えていたことなどが知れる。今後、

発掘調査等において史料と考古資料との整合が計れば、意義深いものとなろう。

柏田の直純寺に伝わる『直純寺由緒書』には「本丸」「南（之）城」「小城」「野首（之城）」の4つの曲輪名とともに、それぞれの規模（本丸：竪四拾三間 横貳拾貳間、南城：竪四拾間 横五拾三間、小城：竪三拾貳 横九間、野首：竪四拾六間 横四拾四間）と関ヶ原合戦当時の守将名が記されている。直純寺は高橋氏時代の城代であった権藤種盛の孫が初代住職を務め、境内には種盛の墓碑が立ち、宮崎城とは因縁浅からぬ寺である。ただし、この『直純寺由緒書』の成立年代は不明である。

幕末、飢肥伊東藩の家老であった平部嶺南の手による『日向纂記』には、関ヶ原合戦当時の、清武城主稲津掃部助による宮崎城攻略について、詳細に記されている。それによると稲津勢は宮崎城の南西にある奈古山に陣を敷き、宮崎城の南西方向に位置する大淀河畔の柏田に伏兵を置いて、清武勢2300余人、飢肥の援兵700余人、総勢3000人をもって宮崎城に攻めかかった。対する宮崎城側は城主権藤種盛以下、士卒100余人、雑兵450余人、都合570余人とあり、更に



第3図 宮崎城縄張図（八巻 1987より転載）

弓20張、鉄砲17挺、槍長刀30筋、大小刀30腰と、その装備まで細かに記している。また、満願寺口、船ヶ崎口、目引口、野頸口などの登城路や、柏田曲輪、本丸などの曲輪名と、各守将、配置された人数まで記され、清武勢のうち、本丸や各登城口への一番乗りの功があったものや、首領級の首級を挙げたものの名が記されている。

『日向纂記』の記述は詳細であり、歴史ドラマとして生き生きと描かれ、当時の情景が眼前に浮かぶようである。ただし、宮崎城が城郭として機能した時より大きく隔たった幕末に著されたものであり、また著者の平部嶠南は、いわば宮崎城の敵方であった伊東家の家老である。さらには、宮崎城を攻略した稲津掃部助は、その後、主家の意に従わなかったとして切腹させられている。このような複雑な事情を反映している可能性もあり、記述のすべてを事実として鵜呑みにはできない。

同じく平部嶠南が明治期に記した『日向地誌』は、県内全域にわたって、各郡、各村の面積、地勢、人口、産業、寺社、史跡等を記した膨大な地誌である。その中に、宮崎郡池内村の古跡として、宮崎城が記載されている。記事には「椎城（本城）」「齊藤城」「服部城」「長友城」「彦右衛門城」「射場城」と各曲輪の名称があり、人名が付くものは慶長年間における各曲輪の守将の名としている。また登城口についても「四門アリ西南門ヲ目曳口ト云東南門ヲ船ヶ崎口ト云東北門ヲ野頸口ト云満願寺口ト云」と記している。このうち、東北門の野頸口については、『日向纂記』の段階では「野頸口・柏田曲輪廻リノ大将ニハ権藤仲右衛門尉……」と記載し、城西の柏田方面に面していると考えていたようであるが、『日向地誌』において東北門と訂正したようである。現在、城の北東方向の迫に2本、南東方向の迫に2本（うち1本は最近の取り付け）、今日でも利用されている明確な登城路があり、細部において当時との違いはあろうが、大枠のルートとしては、『日向地誌』記載の「野頸口」「満願寺口」「船ヶ崎口」に比定できる。また西南の「目曳口」についても、現在は殆ど使われていない尾根上の道があり、「目曳口」に比定されるかと思われる。『日向地誌』には城の北東に位置する満願寺についても、真言宗都於郡黒貫寺の末寺で、明治3年に廃寺となったことを記している。

『日向地誌』は現地での踏査や聞き取りを主として記述されたものである。各曲輪の名称などは、極めて個性的なものであり、現在でも地元で親しく用いられているものではあるが、宮崎城が城郭として機能していた当時のものか否か、慎重に検討する必要がある。

なお、前述の『直純寺由緒書』であるが、同文書記載の曲輪名は、「野頸」以外に『日向纂記』『日向地誌』の記載と合致するものがなく、「南之城」「小城」と極めて客観的な名称である。その成立年代は、少なくとも「服部城」「彦右衛門城」などの個性的な呼称が成立、定着する以前の、江戸期のことと思われる。

【参考文献】

- 石川恒太郎 1980 「宮崎城」『日本城郭大系』第16巻 新人物往来社
富永 嘉久 1985 「上井覚兼日記の研究（二）」『宮崎県総合博物館研究紀要』第10輯 宮崎県総合博物館
八巻 孝夫 1987 「宮崎城」『図説中世城郭辞典』3 新人物往来社
吉本正典編 1999 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』宮崎県教育委員会

第三章 宮崎城周辺の地名

宮崎城は宮崎市池内町、上北方町にまたがって所在する。周辺の小字名には、「城」をはじめ、「麓」「柿下」「城代」など城郭の存在を如実に示すものが多数見受けられる。「内ノ丸」「堀ヶ迫」「大堀」「古門」「陣ノ平」「新馬場」「鍛冶屋園」「伊勢領」など城郭の構造物や周辺の存在を示すものや文献上に表れる「前吾田」「後吾田」「目引」「金丸」などのほか、「古道下」「寺迫」「寺前」「桑田」「八幡田」「数太木」「地金」など、直接的に宮崎城に関連せずとも、歴史のありそうな地名もある。

第Ⅱ章に述べたとおり、『上井覚兼日記』には、登城口として「金丸口」「和田口」「柏田口」「目曳口」の記載が見える。現在、宮崎城には5本の登城路があり、多くは曲輪平坦面の畑地利用のために供されてきた。そのため、城郭として機能していた当時のままとはいかないであろうが、基本的なルートとしては当時のものを踏襲していると思われる。

『上井覚兼日記』に記載される登城口のうち、「金丸口」「和田口」「目曳口」については、先述の小字名「金丸」「前吾田」「後吾田」「目引」と関連している可能性が高い。池内町金丸は城の北東、山麓の水田部分にあたる。現在、この付近から寺迫を通り、万願寺跡を起点として西方向と南西方向の2つに分かれる登城路があり、このどちらかのルートが、「金丸口」にあたると思われる。同じく池内町前吾田・後吾田は城の南西部^東部^西部^東にあたり、特に後吾田は、山麓^東部^西部^東から斜面、頂部の曲輪の一部と大型の土塁を具えた外柵形の虎口を含む範囲である。現状で山麓からこの虎口へと至る道があり、『上井覚兼日記』に記載された「和田口」と思われる。また上北方町目引は、城西中央の斜面及び山麓の目引池を含む一帯で、現在、目引池の北から尾根上を通り、曲輪へと至る電力鉄塔保全用の山道があり、「目曳口」の可能性が高い。また『上井覚兼日記』中には「目曳之口弓場」の記載がある。「目曳口」の山麓一帯が、字「伊手本」「伊屋坊」となっており、あるいは「射手」「射矢」に通じるのかもしれない。

『上井覚兼日記』に見えるもう一つの登城口「柏田口」については、明確ではない。現在、宮崎城ののる丘陵とは迫を挟んで西隣の丘陵の南端、大淀川のほとりが大字瓜生野字柏田・渡となっており、この一帯が『上井覚兼日記』に何度か登場する柏田で、河川利用等に関して重視されていたと思われる。「柏田口」は、この柏田方面へと抜ける道であり、覚兼時代に整備が行われたことも記されている。現況には「柏田口」に相応しいルートは見出せない。ただし、地番図を見ると、宮崎城の南端からそのまま主尾根上を南下したのち、城の南西に降りる、今は失われた道の痕跡があり、あるいは、これが「柏田口」かと思われる。

また平部嶠南が明治期に記した『日向地誌』には、「目曳口」「船ヶ崎口」「野頸口」「満願寺口」の4口とそれぞれの方角が記されている。田代学氏の研究では、「目曳口」以外の登城路について、寺迫から満願寺跡を岐点として南西にのびるルートを「満願寺口」、西にのびるルートを「野頸口」、上記「和田口」を「船ヶ崎口」に比定している。ただし、『日向地誌』は幕末から明治にかけて、地元での伝聞を主として書かれたものであり、『上井覚兼日記』に記述の無い「船ヶ崎口」「満願寺口」については、宮崎城が城郭として機能していたころまで遡れるものか

否か、慎重に検討する必要がある。

また『日向地誌』と同じく、覚兼時代以降に記された『直純寺由緒書』や『日向纂記』などには、「本丸」「小城」「南（之）城」「椎城」「齊藤城」「服部城」「長友城」「彦右衛門城」など、多く個性的な曲輪名が記載されている。ただし、どの曲輪にどの呼称を比定するかは資料間において齟齬が多い。また「船ヶ崎口」「満願寺口」と同じく、城郭として機能していた期間に用いられた呼称である確証はないため、不用意に用いることは避けるべきであろう。上記の曲輪名は、個性的な名称だけに、現在でも地元で、親しく用いられており、その意味においては、尊重すべきと思われる。

【参考文献】

田代 学 2003 「原典史料にみる宮崎城」『宮崎県地方史研究紀要』第27輯



第4図 宮崎城周辺の小字名 (Scale : 1 / 15,000)

第IV章 宮崎城の構成

千 田 嘉 博

第1節 立地と歴史的背景

宮崎城は宮崎市街の中心から北6 kmに位置する宮崎市池内町に所在し、主郭は標高93m、山麓との比高差が約70mの丘陵上に占地していた。宮崎城はいくつもの頂部や鞍部を含む南北に伸びた丘陵を利用しており、周囲の丘陵と比べてとりわけ高い地形ではない。しかし樹木が茂っている現状でも木々の間からの眺望はよい。また城下集落を形成するのにふさわしい支谷にめぐまれ、城の南西2 kmには大きく蛇行した大淀川が迫って水運の掌握に適したことも、ここが城に選ばれた理由であろう。宮崎城には、池内城、龍峯城、目曳城、馬索城の別称があった。

この城の歴史は南北朝期にさかのぼり、その後、室町期から戦国期まで都於郡城に本拠を置く伊東氏家臣が城主を務めた。しかし伊東氏は1572年（元亀3）に木崎原の戦いで島津氏に敗れ、1577年（天正5）の福永氏謀反を契機に豊後国に退いた。そして島津氏は翌1578年の高城耳川の戦いで大友氏を撃破して、日向国のほぼ全域を掌握した。

島津氏は1580年（天正8）頃までに島津義弘領の諸県郡西部、島津氏一族の北郷氏領であった諸県郡南部などを除いた諸地域に地頭を配置し、地頭・衆中制を整えた。こうして成立した島津氏の日向国支配の拠点城郭は30ヶ所以上におよんだ。宮崎城もそうした拠点城郭のひとつに数えることができる。

宮崎城は1578年に島津忠朝の家臣日置忠充が城主となり、1580年（天正8）8月から1587年（天正15）5月頃まで上井覚兼が城主になった。覚兼は1545年（天文14）2月11日生まれなので、36才から43才にかけてのことであった。このとき覚兼は島津家老中の職にあり、鹿児島にいた当主・島津義久の名代として佐土原城の島津家久を助け、先に記した島津義弘領、北郷氏領を除く日向国の政治と軍事を統括した最高責任者であった。だから宮崎城は島津時の日向国支配において、もっとも重要な拠点城郭であったといえる。

こうした重要性とともに宮崎城を戦国史上でわすれることができない城にしたのは、城主の上井覚兼が書き残した日記の存在である（『上井覚兼日記』大日本古記録）。南九州戦国史の基本史料になっているこの日記によって、宮崎城内や麓の構造が知られるだけでなく、政治や戦い、日常の信仰・儀礼・文芸などのようすを具体的につかむことができる。これほど詳細な城主本人による同時代史料に恵まれた戦国期城郭は全国的にもまれである。後述するようによく残る現地遺構と合わせ、宮崎城の歴史的価値はきわめて高いと評価できる。

上井覚兼は宮崎城主として政務を果たすとともに、各地に出陣した。覚兼の宮崎城主としての最後の出陣は豊後国の大友氏攻めであった。1586年10月15日に宮崎城から出陣し、豊後国利満城下の戦いで日向衆を率いて秀吉から派遣された仙石・長我部連合軍を撃破した。この年は大友氏の城下町の府中（大分市）で越年している。

ところが羽柴（豊臣）秀吉が「九州国分令」違反として島津氏討伐のため大軍を派遣したこと

を受けて覚兼は1587年3月に宮崎城に撤退した。当然、宮崎城の改修を進め、防御を固めたであろう。そして同年5月には進軍してきた羽柴秀長に降伏した。覚兼は降伏後すみやかに宮崎城を退去したと思われる。羽柴秀長は覚兼が飼っていた白南蛮犬を強く望んだ。しかしなかなか白南蛮犬を譲らなかったようで、覚兼は督促を受けている。最終的にどうしたかはわからない。その後覚兼は薩摩国伊集院の地頭を務めたが、45才の若さで1589年（天正17）に病没した。

覚兼退去後の宮崎城は縣三城とともに高橋元種の領地になった。元種は縣の松尾城を本拠としたので、宮崎城は権藤種盛が城主を務めた。1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いでは、高橋元種はのちに徳川方の東軍に寝返ったが、最初石田方の西軍に味方したため、東軍に属した飢肥城主伊東祐兵の家臣で清武城主の稲津掃部助に9月29日夜に急襲された。権藤種盛は弟の種利、種公らと防衛に努めたが落城し、自刃した。直純寺（宮崎市瓜生野）に伝わる文書によれば、本丸の城主は権藤平左衛門尉種盛、南城代は権藤八右衛門尉、小城と野首の城代は権藤忠右衛門尉とする。

関ヶ原の戦いののち、宮崎城は高橋元種に返還されたが、元種は1601年から延岡城を築いて新たな本拠を整備しており、落城で大きな被害を受けた宮崎城をどの程度修復したか明らかではない。後述するように石垣や定型的な枡形といった慶長期にふさわしい痕跡が見られないことから、これ以降に最低限の維持はされていたとしても、実質的な城郭として宮崎城が整備されていたのは1600年の攻城戦までと見てよいだろう。

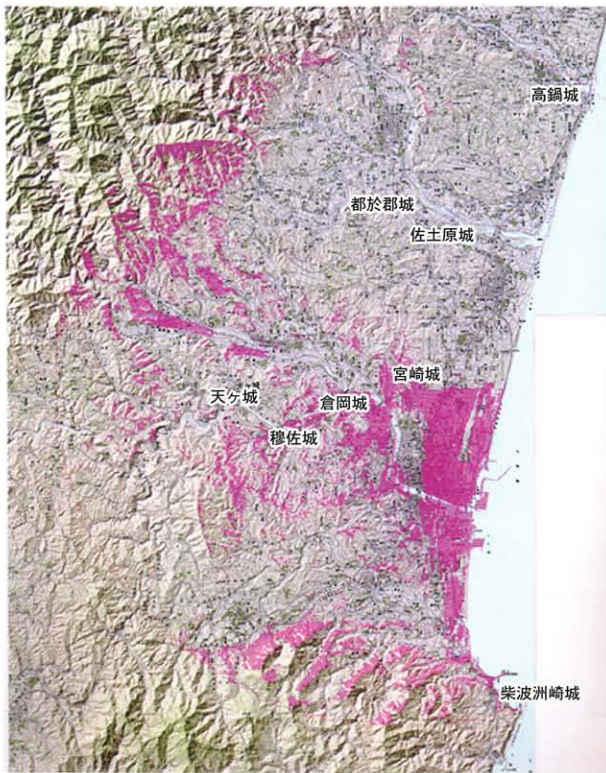
第2節 宮崎城からの眺望シミュレーション

宮崎城内の眺望を現実的な可視範囲をシミュレーションしてみよう(1)。その結果を図示してみると宮崎城は南東および南西方面への眺望に特にすぐれたことがわかる(図5)。現在の宮崎市街地を挟んで南20kmに位置し上井覚兼の父親・薫兼が居住した紫波州崎城は、宮崎城からの南側可視範囲の限界線上にあり、両城が南北で宮崎平野を押しやる位置になっていたことがわかる。

宮崎城からほぼ真南には、城とそれほど高さが変わらない丘陵がつづくので、現在の総合文化公園から宮崎市役所にかけてのラインには見通せない範囲が広がっていた。しかし大淀川の上流に向いた南西方面は川筋に沿って眺望が開けた。大淀川沿いには宮崎城から南西約5kmの位置に倉岡城、そこから南西約4kmに穆佐城、そこから北西約4kmに天ヶ城が位置して、濃密な拠点城郭のネットワークを構成していた。

それら戦国期の宮崎城と同時期に存在した大淀川沿いの拠点城郭群は、いずれも宮崎城から直接望むことが可能であり、もちろん逆に宮崎城を眺めることもできた。烽火による連絡が重要であった戦国期において、互いに確認しあえることは今日考える以上に意味をもったに違いない。

こうした良好な南側への眺望に対して、宮崎城から北側への眺望は近隣1～2km程度のき



第5図 宮崎城からの可視範囲

わめて限られた範囲に留まった。宮崎城が歴史もっとも重要な役割を果たした上井覚兼時代には、宮崎城は日向国において最上位の拠点城郭であったから、北側への眺望を欠いたのは拠点城郭として問題であった。

しかし宮崎城から北東約9 kmには、島津氏当主の義久の末弟・家久が城主を務めた佐土原城があり、信頼できるこの城の存在によって宮崎平野北側の防御線を構成した一ツ瀬川と宮崎城北側の丘陵部を完全に掌握できた。佐土原城との連携によって宮崎城北側の眺望の問題は解決されたのである。

城からの可視範囲の大小や特色は、直接的には城の立地のあり様を示した。しかしどの範囲を見渡せたかは、その城の築城主体の政治的立場や権力の大きさに対応した。だから城を資料として読み解く際に可視範囲の問題

は大きな要素になる。宮崎城の立地の特性を政治史的な視点から考えると、北側を見通せない立地は上井覚兼と島津家久との微妙な政治関係を反映したと評価できる。

覚兼は日向国の責任者ではあったが、家久をほかの地頭と同じに扱うことは決してできなかった。家久は当主・義久の名代であり、実質的な権限は覚兼がもっていても名目的には家久が上位者であった。こうした複雑な政治関係が相互に見通せない宮崎城－佐土原城の立地に反映したといえるだろう。

第3節 宮崎城の構造

(1) 構造の特色

宮崎城は南九州の典型的な中世城郭の形態をとり、複数の曲輪が並立的に連結した構成をとった(図2)。主郭を中心とした求心構造(曲輪間の階層性)が相対的に乏しく、それぞれの曲輪群が屋敷地を基本としたことから、わたくしはこうした城郭を館屋敷型城郭と呼んでいる[千田1990・2000]。宮崎城は館屋敷型城郭のなかでも宮崎県の都於郡城や、鹿児島県の知覧城・志布志城と並び、もっとも大規模で遺構の保存にすぐれた中世城郭である。

こうした城郭プランのあり方は、シラス土壌という地質によるところもあったが、より主要な形成要因は築城主体の分立的な権力構造を反映したことにあつた[千田2003]。そうした権力構造の特質は城郭プランに色濃く刻印されただけでなく、くり返された会所的儀礼による城主と家臣との信頼関係の構築など日常の細部におよんでいた。発掘調査が進めば、建物構造とともに

に儀礼を示す遺物の量と分布などから考古学的にも分立的権力の痕跡を浮き彫りにできるだろう。

(2) 主郭

先に述べたように宮崎城は主郭をいずれを主郭とすべきか迷うほど並立的なプランをもった。しかし曲輪Ⅰは曲輪群の中央に位置して防御上有利な場所にあったこと、曲輪Ⅲとほぼ等高ではあるが城内中の高所を占めたこと、内部を分割して使用した痕跡がない単郭の広い曲輪であったことから主郭と判断される。『上井覚兼日記』には「内城」の記述があり（天正11年2月14日：上巻203）、主郭をさしたものと思われる。当該期は内城と呼ばれたと見て間違いない。直純寺（宮崎市瓜生野）所蔵の文書はこの曲輪を「本丸」とし、『日向地誌』は「椎城」とする。

現状は植林された樹林、草生え地、耕地跡になっており、ごく一部を送電線の鉄塔建設によって破壊されている。周囲に土塁を備えた痕跡は見あたらず、急峻な切岸が囲う。北側の曲輪Ⅲ、南側の曲輪Ⅱに対してはそれぞれ堀切りをめぐらした。特に曲輪Ⅲに面した堀切りの規模は大きい。この堀切り底には現在も東側の谷筋から宮崎城に登る山道が入り込んでおり、こうした城道のあり方は中世にさかのぼると見てよいだろう。

『日向地誌』はこの道を「満願寺口」とし、西側の谷筋の道を「目曳口」とする。『上井覚兼日記』に見える「目曳口」はこれに違いない。現在は地名が伝わらない『上井覚兼日記』の「金丸口」は「満願寺口」であった可能性が高い。

しかし曲輪Ⅲとの間の堀切り底を経由して、本来どのように主郭の曲輪Ⅰに入ったかは地表面観察では明らかにできない。現在は曲輪Ⅰ北東の小さな帯曲輪を通して曲輪Ⅰに入るが、この道筋は鉄塔建設時の新しい改修が加わっており、また切岸の登り方が不自然なところなど、当時の城道とするには不審な点が多い。曲輪Ⅰの北西隅直下にもごく小さな腰曲輪があり、ここをつないで曲輪Ⅰに入った可能性もある。

いずれにせよ曲輪Ⅰの北側墨線周辺には土木工事による枡形など、出入り口を特定する手がかりがなく、地表面からはその特定はできない。それに対して曲輪Ⅰの南側、曲輪Ⅱに面した墨線には、堀底に向けた切り込み状の出入り口が見られる。位置と大きさ、堀底への連絡状況から考えて、これは本来の出入り口であったと判断できる。主郭であった曲輪Ⅰはその位置と役割から考えて、南へも北へも密接に連携するためにそれぞれ城道を伸ばし、曲輪との接点には出入り口を設けていたが、このように北側と南側で出入り口の様相は対照的だった。

曲輪Ⅰの南出入口とその先の城道に関しては、いくつかの復原プランを提示できる。現在、曲輪Ⅱ a と曲輪Ⅱ b・Ⅱ c 間とを区分した堀に多数の間伐材が投げ込まれていて、ほとんど堀が埋没して深さを観察できないことが解釈をむつかしくしている。現状では曲輪Ⅰの南出入口から外へ出た城道は、すぐ南側の堀切りを土橋で渡るが、曲輪Ⅱ a と曲輪Ⅱ b・Ⅱ c 間とを区分した堀の堀底には降りずに、曲輪Ⅱ a 側の切岸に沿った部分を進む。しかしここは曲輪Ⅱ a の切岸を二次的につけた道で崩れてつくった疑いがあり、本来の状況ではないようである。

もちろん曲輪Ⅰの南出入口の前面にあった堀切りを土橋で渡ることは、それだけで見れば何もおかしくない。しかしこの堀切りと、曲輪Ⅱ a と曲輪Ⅱ b・Ⅱ c 間とを区分した堀との関係を

も考えると、にわかに問題は複雑化する。第1の可能性として、曲輪Ⅰ南側の堀切りと、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀が同じ深さだったとすると、両方の堀はT状に交わり、曲輪Ⅰを出た城道もそのまま曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀底につづいたと復原できる。すると曲輪Ⅰ南の出入口を出た先は、土橋というより出入口と堀底とを結ぶスロープ状の通路だったことになる。

第2の可能性として曲輪Ⅰ南側の堀切りの底がより深く、曲輪Ⅱaと、曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀底が浅かったとすると、曲輪Ⅰの南側出入口を出た城道は、まず手前の深い堀切りを土橋で渡り、土橋を渡った先でやや浅い曲輪Ⅱaと、曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀底につながったと復原できる。

ここまで曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀の底を歩いたことを前提として解釈を進めてきたが、堀の中央には曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・c・dとを結んだ土橋が現状では見える。この土橋も本来のものか、あるいは後世に林業などのためにつくったものか問題が残る。もし本来の姿だとすると堀底を城道にしたと考えることと矛盾する遺構である。わたくしはこの土橋は後世に付加されたもので、本来はなかったと考える。もしこの位置になにかあったとすれば堀底の段差がついていた程度ではないかと推測する。

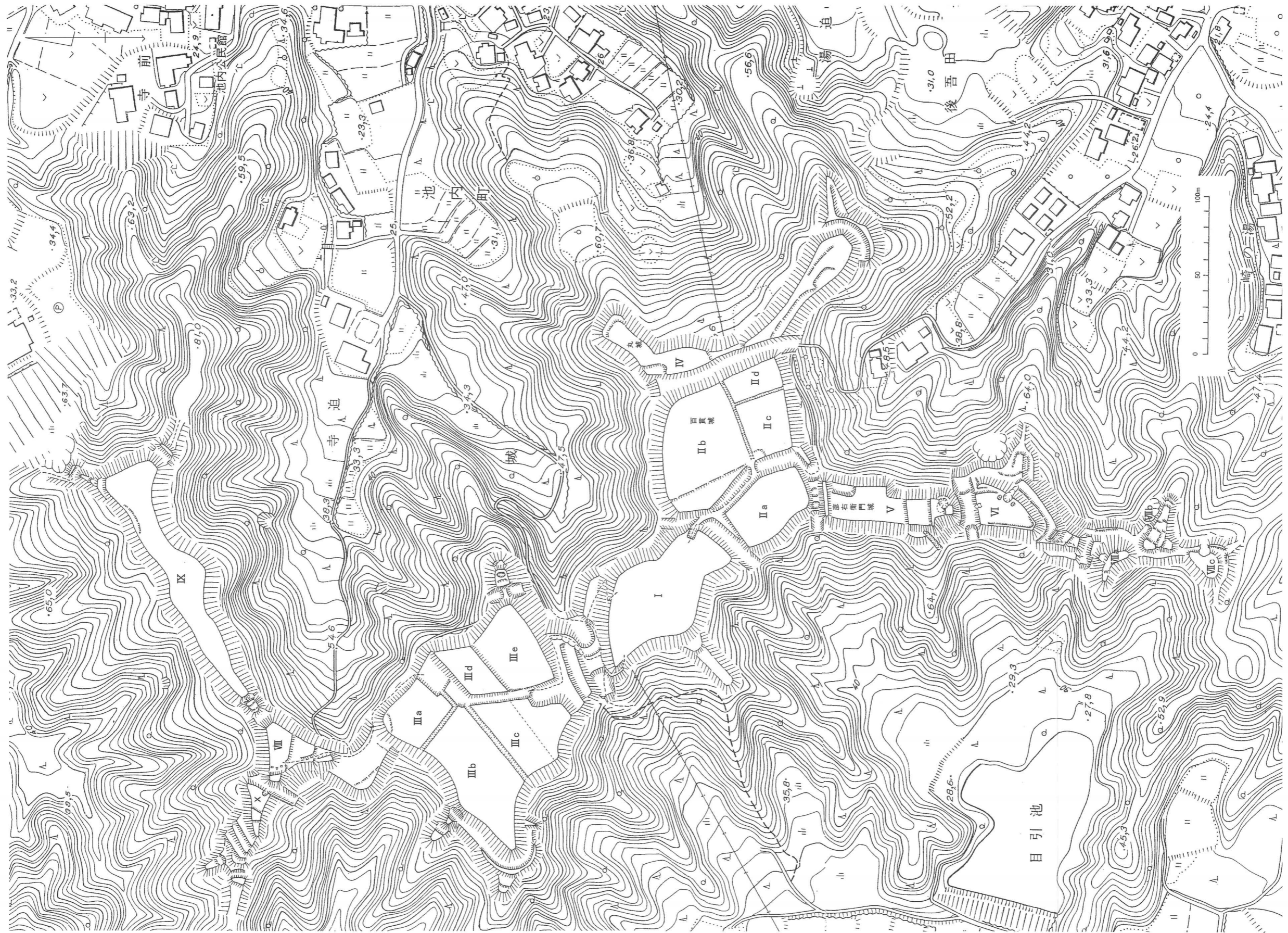
いずれにせよ曲輪Ⅰから南側への城道をどのように把握するかは、宮崎城中心部の解釈に大きな位置を占め、将来の史跡整備においてもポイントになる部分である。曲輪の平場だけでなく、こうした遺構を発掘調査で確認することで、宮崎城の個性をさらに見いだすことができるに違いない。

確定できない部分は残るが、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀を通過して、城道はⅡa南直下の外柵形に至ったとするのが、全体から考えてもっとも蓋然性が高い復原である。この一連の出入口と城道とによってできた構成を外側から中心に向かって叙述すると、まず最初に外柵形という権力表象的で、防御と出撃性の高い出入口が設定され、そこを通過して進むと曲輪群の間を突き抜ける直線的で幅の広い堀底道がつづき、さらにその奥に堀切りで守った切り込み状柵形の主郭（曲輪Ⅰ）出入口が控えていたのである。

曲輪Ⅱのそれぞれの削平地は後述するように屋敷地であったことが確実で、曲輪Ⅱのなかを通った城道は、城内屋敷の間を抜け、それに見下ろされた直線城道だったと復原できる。主郭の切り込み状の、内柵形を指向した柵形空間と、曲輪Ⅱa南直下に張り出した城道の先端に開かれた外柵形とは、両者の間の城道を挟んで連動した一对の城門であり、これら城道と空間とはひとつづきの虎口空間と評価することができる。

曲輪Ⅰと曲輪Ⅱが連携してできあがった城道と出入口との組み立ては戦国期の出入口として達成度が高い。戦国末期におけるこの地域の城郭プランにおける到達点を示すと考えてよいだろう。このように主郭であった曲輪Ⅰの南北出入口の違いは、単純に曲輪Ⅰの塁線での出入口の顕在／不顕在といった問題ではなく、宮崎城中心部の構成に深く連動していた。

つまり曲輪Ⅰの南北の出入口の差は、南のものが城郭全体の大手の出入口の機能を担い、北のものが城内の曲輪間の連絡を担った通用門的な機能を果たしたことによる違いと読みとれるのである。ちなみに直純寺の文書は曲輪Ⅱa南直下の外柵形を「大手口」としており、遺構が



第6図 宮崎城縄張図

らの評価を補強する。

なお現状では曲輪Ⅱと曲輪Ⅲとの連絡には曲輪Ⅰを経由するほかないが、主郭を通り抜けて曲輪Ⅱと曲輪Ⅲが日常的に連絡していたとは考えにくい。間違いなく曲輪Ⅰの裾をまわって連絡した城道があったものと思われる。曲輪Ⅰの南北にあった堀切り先端部から城道が伸びていた可能性もあり、今後精査をする必要がある。

(3) 曲輪Ⅱ・曲輪Ⅳ

曲輪Ⅱは主郭の曲輪Ⅰ南側に接し、曲輪Ⅲとともに大きな面積をもった。直純寺の文書は曲輪Ⅱ全体を「百貫ショウジ」とし、『日向地誌』は後述する曲輪Ⅱaを「齋藤城」、曲輪Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdを「百貫城」とする。近年の宮崎市教育委員会による聞き取り調査でも曲輪Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdは「百貫城」と呼ばれていた。

曲輪Ⅱの内部は中央を南北に伸びた堀で東西に大きく二分された。さらに中央の堀の東側の曲輪は小さな区画溝で3つの平坦地に分けられた。曲輪Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdである。小さな区画溝は直接には近年まで使用していた畑の境溝であろう。しかし平地城館の堀や土塁、城下町の屋敷区画が近代の地籍図に表され読みとれるように、こうした畑の境溝も戦国時代の曲輪Ⅱの屋敷区画を踏襲した可能性がある。

主郭をとりまいた大きな曲輪群は、後述するように『上井覚兼日記』の記述から「城内衆」の屋敷群として使用したことがわかり、本来も堀や溝で曲輪内部をいくつかに分けていたことが確実である。将来の発掘調査ではそれぞれの建物群と合わせ、区画と屋敷へ出入りした曲輪内の通路とを明らかにすることで、まとまりある屋敷地を把握することが重要である。

曲輪Ⅱのいずれの平坦地にも墨線沿いの土塁は見られない。また出入り口の痕跡もはっきりとしない。ただし曲輪Ⅱa北側の帯曲輪が出入り口のための虎口空間として機能した可能性はある。曲輪Ⅱbは踏査時はきびしいブッシュになっており、充分内部を踏査することはできなかった。堀に面した西側は一段低くなっているが、虎口空間とするには大きすぎる。曲輪Ⅱc北西の堀から上がり込んだところは若干低くなっている。これは後世の土地利用によってできた窪地と考えられる。しかしここも虎口空間であったと捉える余地は残り、注意は必要である。

曲輪Ⅳは曲輪Ⅱの東側に位置し、両者の間には幅10m程の堀切りがある。直純寺の文書は「猿渡」、「馬乗馬場」とする。『日向地誌』には記載がない。またここを「丸城」とする伝承もあるようである。直純寺の文書は曲輪Ⅵを「丸城」としており、重複している。「丸城」を個々の曲輪の名称だとすれば重複は問題であるが、たとえば愛知県尾張部の中世城郭では城域端部の防御に比重をおいた曲輪を「端城」もしくは「羽城」と広く呼んでおり、曲輪の機能に基づいた呼称であったことがわかる。

「丸城」も「端城」に相当した機能に基づいた呼称であったのならば、いくつかの曲輪をそう呼んでいてもおかしくはない。しかし今のところ管見の限りでは「丸城」を機能に基づく呼称として南九州で広く使っていた証拠はなく、記録や伝承の矛盾と理解すべきであろうか。今後なお注意しておきたい。

さて曲輪Ⅳに対しては内側の曲輪Ⅱがより高所にあり、曲輪内を見下ろした。曲輪Ⅱから堀

底までは5m程の比高差があり、切岸も急なので防御性はたいへん強かった。曲輪Ⅳは尾根筋が細長く伸びた上につくられており、曲輪そのものも細長く、屋敷地に使ったというより防御機能に主眼をおいた曲輪だと評価される。曲輪面の削平度も曲輪Ⅱと比べるとやや劣っていた。

曲輪Ⅳと曲輪Ⅱが直接連絡したか否かはやはり地表面観察からは明らかではない。曲輪Ⅱにあった屋敷地の間に曲輪Ⅳへとつづく堀切りを超える道が伸びていたと考えることはできる。しかしそれだけでなく曲輪Ⅱの南辺切岸の直下から、曲輪Ⅱ・曲輪Ⅳ間の堀切り底に入り、曲輪Ⅱ北辺切岸直下を通して曲輪Ⅰ東辺切岸直下へとつづく曲輪外縁部の周回路があった可能性が高い。

曲輪Ⅳの北東部と南東部はそれぞれ大きく張り出した。このうち地形が相対的に緩やかな南東部の先端部には堀切りを備えて尾根筋からの侵入に対処していた。この堀切りには比較的明瞭な対岸土塁を見ることができる。

(4) 曲輪Ⅲ

曲輪Ⅲは曲輪Ⅰの北側に位置した大型の曲輪であった。直純寺の文書は「野首城」とし、地元でも同様に呼称している。曲輪の周囲はそれぞれ堀切りを配して防御した。曲輪Ⅲ北側の尾根は曲輪Ⅷにつづく主尾根になっており、現状では明確な堀切りは見あたらない。しかし子細に観察すると曲輪Ⅲの北側墨線の切岸直下が帯状に低くなっており、堀切りが埋没している可能性が高い。今後の発掘調査が待たれる。この鞍部に東側から連絡した城道を『日向地誌』は「野首口」とする。『上井覚兼日記』にも「野首口」は見える。

曲輪Ⅲ東側の尾根には現況曲輪面からの比高差10m、堀底部での幅8mの堀切りを備えた。堀切りの延長は長い豎堀にしている。堀切りの対岸側には四角く小規模な曲輪を設けた。この小曲輪は櫓台であったと推測され、曲輪内の窪みは穴蔵状施設の痕跡であった可能性がある。

曲輪Ⅲ西側の尾根には半円形に長く伸びた堀切りを設けた。この周辺の地形が緩やかになっていることへの対処であった。堀切りの外側にはわずかな対岸土塁が見られる。またこの堀切りの北端部ではもうひとつの小さな尾根が張り出していた。そこでここにも対岸土塁を築き、さらにその外側にもうひとつの小さな堀切りを設けて万全の構えをとっていた。

この堀切りを設けた尾根は長く南西に伸びたが、曲輪群から遠く離れた尾根筋の先に堀切りを設けており、尾根を伝っての侵入を強く警戒していたことがわかる。

ただし堀切りの周囲を曲輪化して固めたようすは顕著でなく、また堀切りとしての規模もさほど大きくないので臨時の施設であろう。また2本ある堀切りのうち、より西側の1本は、尾根上の小ピークの東寄り（宮崎城寄り）に設置しており、気になる配置である。宮崎城を守るための配置なら、この小ピークを取り込んだ頂部の西寄りに設置するのが定石である。わざわざ頂部を陣地化できない東寄りに堀切りを入れた意図はうまく説明できない。

しかし宮崎城を攻めた側が築いた施設だと仮定すると、宮崎城中心部につながる尾根筋の頂部のひとつを占拠し、宮崎城側に2重の堀切りを築いて反撃に備えたと解釈することができる。この遺構が臨時施設的な様相を示すこともうまく一致して整合的である。そうした可能性をもふまえ、今後評価していく必要があるだろう。いずれにせよ曲輪群から遠く離れた堀切りは

今のところここしか見つかっていないので、宮崎城周辺の尾根筋を精査して、類似の遺構があるか否かを確認してから最終的な評価をしたい。

曲輪Ⅲの南側の尾根は曲輪Ⅰに接しており、両者の間は自然の鞍部を利用した大きな堀切りになっていた。幅は18m程にもなる。この堀切りには東西両方向から宮崎城へ登り降りする道が接続しており、当時も同様の状況だったと考えられる。この堀切りに面して2段の帯曲輪があり、帯曲輪の上段は曲輪中央を南北に伸びた通路につながった。この通路は周囲の曲輪面に対して低くなっており、堀底道を継承した。

この曲輪Ⅲの城内道は現況でも明瞭にたどることができ、現在も道として使用されている。この道をたどった北端は東側に折れ曲がって、さらに低くなった四角い窪地になっている。ここは現在行き止まりの窪地であるが、城内道の幅より広がった矩形のかたちから、もともと出入り口の虎口空間であった可能性が高い。城内道よりも一段低くなっていたことも虎口空間だったとすれば合理的である。宮崎城の中心曲輪群の北側関門にふさわしい整った出入り口といえる。

この出入り口は城道の折れと空間を組み合わせた出入り口と解析でき、定型化したものではないが内枳形と評価される。先に見た南側の中心曲輪群の出入り口(曲輪Ⅱ a 切岸直下)が外枳形であったことと一対と意識して北側の中心曲輪群の出入り口を内枳形にしたと評価できる。宮崎城のプランが高度な一貫性を備えたことを示す。

曲輪Ⅲの内部は溝と段差で5つに区分され、それぞれ本来は屋敷地として使用したものと思われる。曲輪Ⅱでも述べたように、曲輪内に見える溝は、直接には所有者境を示すにすぎないが、ある区画が地割りとして残り、それが長期間継承されて地籍図に反映したように、こうした溝はもともとの屋敷地境を継承した可能性が高い。

Ⅲ aは北端部を占めた屋敷地で、Ⅲ bとは溝で分けられた。Ⅲ bは曲輪Ⅲの中でもっとも大きな面積をもった。Ⅲ cは南西部分の屋敷地で現況では北半部が竹林に、南半部が草生地になっていることから、こうした植生の差も所有者の違いに起因しているのであれば、もともとの屋敷地に起因した歴史性を表層で示す手がかりであるかもしれない。

Ⅲ d・Ⅲ eは曲輪Ⅲの中央を南北に伸びた城内道の東側に位置し、Ⅲ dが一段高い。Ⅲ eの東側には小さな尾根が伸びており、先述のように堀切りを設けて防備に万全を期した。

(5) 曲輪Ⅴ

曲輪Ⅴは曲輪Ⅱの南方主尾根に位置した曲輪である。直純寺の文書は「彦衛門城」とし、『日向地誌』は「彦右衛門城」とする。曲輪Ⅱとの間には幅10m程の堀切りを設けて分断した。この堀底には明瞭な仕切土塁を見ることができる。仕切土塁の存在から、堀底を通路として使用しなかったことは確実である。しかしどうしてこの堀切りだけが仕切土塁を備えたのであろうか。

この堀切りは東側の外枳形に向かって城道面よりも高い位置で開口しており、そうした位置関係から、外枳形の虎口空間に対する武者隠しとして機能したと解釈できる。この解釈が正しければ、仕切は堀底を塹壕状の施設とするために設けたことになり、総合的に説明可能である。

曲輪Ⅴはこの北側の堀切りに対して土塁を備えた。出入り口になりそうな開口部はこの土塁にはまったく見あたらない。この点も先に見たように、堀切りが通路として使用されなかったと考えたこととうまく整合する。地表面観察では土塁に石塔の石材が混じることから、表面を石張りして補強していた可能性がある。また瓦が散布していることから、何らかの瓦葺きの建物が存在していたことが予測される。

この曲輪Ⅴへの出入り口は曲輪東側の一段低くなった窪地状の小空間であったと思われる。窪地状の小空間が枡形としての役割を果たしたのであろう。曲輪面の削平はよく整っており、中心曲輪群からは外れたが、それに次ぐ位置づけであったことがわかる。曲輪Ⅴは南側に2つの段をもっていてしだいに高くなっていた。そしてその先端は櫓台になっており、南側の巨大な堀切りを見下ろした。

この堀切りは対岸の曲輪Ⅵまで幅15m、堀底までの比高差10mを測り、宮崎城内でも最大規模の堀切りであった。突出した櫓台は今でこそ植林によって見通しを妨げられているが、圧倒的な存在感があり、堀切りと合わせて南側尾根の防御拠点であった。櫓台周辺には瓦の散布が認められ、どうやら瓦葺きの櫓があったらしい。

この櫓台の東脇には地下道につづく大土坑が開口している。掘削にあたって廃土を周囲や東側斜面に投棄した様相も生々しい。この遺構は宮崎城時代のものではなく、第2次世界大戦末期に日向灘へのアメリカ軍の上陸に備えた日本軍陣地の痕跡であるらしい。地下道は地中かなり伸びているようだが、開口部からは奥をうかがうことはできない。しかしこの大土坑はすでに櫓台の東端部を破壊しただけでなく、しだいに遺構に深刻な被害を与えており、遺構の滅失を防ぐ緊急対策が必要である。曲輪Ⅴの西側斜面には小さな帯曲輪と豎堀がある。これらは一応、豎堀と帯曲輪と判断しておくが、先述した大土坑と関連した施設の痕跡かもしれない。

(6) 曲輪Ⅵ

この曲輪Ⅵは曲輪Ⅴのさらに南の主尾根上に位置した。直純寺の文書は「丸城」とする。北側は曲輪Ⅴとの間の大堀切りに接しており、堀底との比高差は5m程を測る。つまり曲輪Ⅴの南端櫓台からは5m程標高が低く曲輪Ⅵは見下ろされた。曲輪Ⅵには北側の大堀切りから直登する道があるが、本来のものではない。この道は切岸と曲輪面を切り崩しており、遺構保存のためには望ましくない。

本来の出入り口は曲輪Ⅵの東側にあり、曲輪内に溝状に一段低くなった城道が確認できる。曲輪Ⅵの北東端からスロープを登って曲輪内に入、南側に折れ曲がって通路を進んだ出入り口プランで、織豊系城郭の定形化したものではないが、よくくふうした戦国末期にふさわしい出入り口である。この出入り口は曲輪Ⅵ切岸下の東側から南側へとつづいた帯曲輪に連結した。この帯曲輪は城道として機能しており、北側へもこの帯曲輪から堀底に降りて宮崎城中心部へと城道が伸びたのだろう。

曲輪Ⅵの西側から南側の墨線にはわずかに土塁を認めることができる。決して大きなものではなく、痕跡程度である。もともと小規模な土塁であったのか、開墾などによる二次的な影響のため小さくなったのか、いずれの可能性もあり得るが、どうやらもともと大きな土塁があったと

いうわけではなさそうである。

この曲輪の東側塁線の中程にも大きな土坑が開口している。単純な穴ではなく、地中に向かってトンネルが伸びていく点も、先に見た曲輪Ⅴの南端に見られた大土坑と共通する。同様のものは曲輪Ⅶcの東斜面にもある。すべて第2次世界大戦末期の日本軍による地下施設跡と見てよい。

これらは周辺の宮崎城の遺構を破壊し、さらに現在でも遺構に悪い影響を与えている。また地下に伸びたトンネルが崩壊すれば、宮崎城の遺構に甚大な被害を与えることになるだろう。雨水などがそのまま流れ込んでいるので、地下トンネル（あるいはその奥の地下室）の傷みは進んでいるものと思われる。

そしてなにより突然巨大な垂直坑が開口しているので、ひじょうに危険である。宮崎城の遺構破壊の進行をくい止め、転落事故を防ぐために、穴をふさぐなどの対策が至急必要だろう。ただし近年では第2次世界大戦時の軍事施設を研究する「戦跡考古学」が活発になっており、学界でも一定の評価を得ている。この巨大な大土坑と地下道を文化財として位置づけることも考慮しつつ、しかし第一義には宮崎城の遺構保存を優先して適切な保護をすべきである。

曲輪Ⅵの南側切岸のはるか下には東側から回り込んできた帯曲輪があり、尾根部分には土塁を備えて堀切りと出入り口との機能を兼用していた。この周囲は雑木林と竹林が混じってきびしい状況だが、いくつかの小規模段が尾根にあり、それをつないでさらに南の堀切へと城道が伸びた。

(7) 曲輪Ⅶ

曲輪Ⅵ南側尾根の小規模段に接した堀切りを超えた先に、3つ曲輪群のまとまりがあった。北側から曲輪Ⅶa、曲輪Ⅶb、曲輪Ⅶcとする。これらの曲輪はいずれも曲輪Ⅵまでの曲輪のつくり方と異なり、曲輪面の削平は充分でなく、切岸も不全な部分を残した。臨時・仮設的な曲輪群と判断できる。

曲輪Ⅶaは3段の曲輪により構成したこの曲輪群の東側に堀底から回り込みながら南へとつづく城道があり、この城道はゆるやかな坂道となって主尾根の鞍部にとりついた。この鞍部の南に位置したのが曲輪Ⅶbで、東に向けて粗雑な段差を数段もった。主尾根にとりついた城道は曲輪Ⅶbの西側を南に向かって伸びた。

この辺りでは山中とは思えない程道幅があり、道部分も鮮明である。中世の宮崎城の城道がその後も継承され、近代まで道として使用されたとしても相対的にできすぎで、先に指摘した第2次世界大戦末期の日本軍による地下施設構築に伴って道筋にも改修を加えていた可能性が高い。

曲輪Ⅶcは宮崎城で確認できる遺構の南端を占めた。東側から南側にかけて城道がとりまきながらつづいた。城道の外側には対岸土塁があり、ここでは道筋が堀状になった。防御にも効果があっただろう。曲輪面の削平は不十分で、曲輪側には土塁などの痕跡は認められない。

曲輪Ⅶcから南の主尾根の踏査も行ったが、これ以上の堀切りはなかった。宮崎城の遺構は曲輪Ⅶcを南限と判断できる。しかし主尾根上のかなり離れたところで時期不明の削平段が

あった。直接宮崎城を構成した遺構とはできないが、屋敷地など関連施設の痕跡であった可能性は残る。将来の発掘調査を待ちたい。そして宮崎城の歴史的景観を守るためには曲輪Ⅶcより南側の尾根筋をバッファゾーンとして保全していく必要があることを付言しておく。

(8) 曲輪Ⅶ

曲輪Ⅶは曲輪Ⅲの北側に位置した。寺迫からの城道（「野首口」）が上がってくる南側の尾根鞍部に向けた3段の曲輪から構成された。直純寺の文書には曲輪名の記載がなく、『日向地誌』は「服部城」とする。曲輪Ⅶを經由して東側の曲輪Ⅸ、西側の曲輪Ⅹに連絡し、北端の曲輪群では要の役割を果たした。現状は除木された草生え地になっており、心地よい空間になっている。南側の尾根鞍部から最上段の曲輪に向けて道がついている。新しい整備の手も入っているが、基本的にはもとの城道を踏襲したと考えてよい。

最上段の曲輪の西側には幅広の土塁があり、空堀を挟んで曲輪Ⅹと対峙した。この土塁は土壇状になっており櫓の存在を推測させる。堀切りは深く尾根筋の侵入を防ぐのに十分な効果を発揮した。堀切りを挟んだ曲輪Ⅹ側には堀切り底から切岸を直接登る窪地状の道筋がついているが、現在まで使用しているので壁面は新しい崩落断面になっている。

曲輪Ⅶから曲輪Ⅹへどのように連絡したかは地表面観察でははっきりしない。現状の道筋はやや不自然であるだけでなく、曲輪Ⅶの最上段の曲輪から曲輪Ⅹ側へ出入りした出入り口の痕跡は認められなかった。この点は曲輪Ⅸへの出入り口が見あたらないことと共通しており、曲輪Ⅶ最上段からは直接、曲輪Ⅸおよび曲輪Ⅹには連絡しなかった可能性が高い。そうすると曲輪Ⅶの中段あるいは下段の曲輪面から脇の切岸を伝って連絡したか、下段の曲輪の切岸下をそれぞれに連絡した道筋があったかのいずれかとしか考えられない。そうした視点からなお慎重に踏査して確定する必要がある。

曲輪Ⅶと曲輪Ⅸとの間には2重の堀切りを設けていた。曲輪Ⅶに近い西側の堀切りは深く切岸も急になっていて強力な遮断線になった。曲輪Ⅸに近い東側の堀切りは浅く小規模だった。中央に土橋があり、2本の堀切りの間にある小曲輪につながっていた。東側の堀切りに沿って土塁を備えていた。小曲輪の防御のためというより東側堀切りの対岸土塁と思われる。曲輪面は西に向かって傾斜した。

小曲輪の機能は形態からは特定できないが、虎口空間的な役割を果たしたと考えられる。現状では曲輪Ⅶ・Ⅸ間の接続は明らかでないが、この小曲輪を經由して曲輪Ⅸに出入りした蓋然性が高い。東側の小さな堀切りは古い時期の空堀が残ったものと評価することもできるが、虎口空間を曲輪Ⅸ本体から分離するためにも有効であった。

(9) 曲輪Ⅸ

この曲輪は宮崎城の北東部に長さ130m程にわたって伸びた長大な曲輪であった。果樹園や畑として近年まで使用していたが、現在は全体的にブッシュに移行しつつある。直純寺の文書によれば「射場城」とする。現在でも地元では「射場城」と呼ぶ。削平は良好で、地表面から曲輪内に大きな段差や溝状の痕跡は見あたらない。曲輪Ⅸの北東端部は北と南東に二股に分かれて

尾根がつづいた。

北側の尾根に対しては3段ほどの小曲輪を重ね、堀切りを設けた。堀切りには明瞭な対岸土塁が認められる。堀切りの端部は豎堀として伸ばしておらず、西側の堀底開口部から尾根を伝って山麓に至る道が伸びた。本来もこうして城道を設定していたと考えてよい。ただし曲輪面から堀切り底へははっきりとした出入り口を確認できない。そのためルートとしてはあっても主要な城道とすることはできない。

この曲輪Ⅹ北東部の北側尾根の堀切りには早急な保全と修景措置が必要である。堀切りが残ったことは幸いであったが、北東山麓の病院建設に伴って堀切りの対岸土塁際まで尾根が大きく削られ、地形が一変している。削土した斜面は安全勾配をとるとはいえ、立木が伐採されており好ましい状況ではない。表土の流失等によって土塁と堀切りに影響が出る可能性がある。この堀切りは宮崎城の北東端を限る遺構であり、確実に保存することが望ましい。

曲輪Ⅹ南東の尾根にも堀切りを設けた。曲輪面から堀底までの比高差は4mを測る。切岸は急斜面を保ち、堀切りの対岸には比高差を増すための対岸土塁を備えた。堀切りの先はなだらかな尾根がつづくが、この堀切りまでを狭義の城内と判断できる。

長大な曲輪Ⅹはどのように使用されたのだろうか。まず考えられるのが防御機能の比重が高く惣構え的な役割をもち、臨時の人員・物資の収容空間であった可能性である。また別の可能性として城内主要部の屋敷よりも階層の低い層の屋敷地を想定することができる。この点についても今後の発掘調査に期待したい。

(10) 曲輪Ⅹ

この曲輪は宮崎城の北西端に位置した。堀切りを挟んだ曲輪Ⅷからは見下ろされた。東側の堀切りに面した曲輪の削平は整っており、この曲輪から北西に向けた4段の帯曲輪があった。西に主尾根が伸びており、これに対しては堀切りを備えて遮断した。堀切りの外側には対岸土塁が認められる。また主尾根のほかに北に向かって小さな尾根が伸びたが、ここには2段の曲輪をつくっていた。

曲輪Ⅹは城外に向けた尾根上に小規模な曲輪を連ね、曲輪の段差による切岸を重ねたことで城内への侵入を阻止しようとしたことがわかる。防御を強く意識した曲輪群であり、卵の殻のように外周部から中心部の屋敷地を守っていた。しかし城城南端の曲輪Ⅴ・Ⅵの圧倒的な防御の組み立てと比較すると、北方を防御正面と意識していなかったことが明らかである。そうした遺構の特色は、最初に検討した宮崎城の立地と政治的な城郭の配置関係の評価とみごとに一致する。

第4節 『上井覚兼日記』に見る宮崎城

(1) 城内の武家屋敷

『上井覚兼日記』には宮崎城に関連する記述が豊富にあり、ほかの戦国期城郭ではふつう知る

ことができない細かな城内のようすをつかむことができる。ここでは日記をもとに宮崎城内の構造を検討する。

宮崎城の遺構には屋敷地と思われる多数の曲輪が確認できる。『上井覚兼日記』にも遺構に対応した記述を見つけることができる。たとえば「城内之衆廿人計二三献参会候」とあり（天正13年正月：中巻162）、覚兼のほかには城内に屋敷をもった最上級家臣の城内之衆は20人ほどであり、少なくとも20軒の武家屋敷が城内にあったことがわかる。城内之衆のうち氏名が判明するのは、覚兼の3番目の弟で鎌田氏の養子となった鎌田源左衛門尉、関右京亮、柏原有閑の3名である〔桑波田1958〕。

城内之衆は衆中内での格式が高く、毎年正月の覚兼との正式対面においてもやはり「城内之衆計二三献参会候」とあり酒三杯と肴三種の正式な饗宴であったが、「其余八肴一種にて御酒参会申候」と酒一杯に肴一種の簡略の饗宴となって格差があった（天正12年正月：中巻2）。料理については景色などをかたどって盛りつけた「押物」があったことがわかり（天正11年正月：上巻189）、正月にふさわしい。

城内之衆は覚兼よりも上位者への使者を務め、覚兼に代わって来訪者を謁見・面談するなど、城主である地頭の覚兼の政務を補佐した。軍事面でも中核的な役割を果たしており、格式に見合った重い役目を負った。この城内衆と対比され、「其余」とされたのが「麓之衆」であった。城内ではなく宮崎城の山麓にそれぞれ屋敷を構えたものと思われる。地形から考えて宮崎城の周囲の谷筋に麓之衆の屋敷があったと推測できる。

もちろん山麓の屋敷群がどの程度凝集していたのか、ということは現在のところ判断する手がかりがない。しかし覚兼の帰城に合わせて衆中がすみやかに集まっているようすから判断すると、ある程度高い凝集度であったと見てよい。山麓部には惣構えに相当した施設は見あたらず、麓之衆の居住した城下の凝集域を外郭とすることは、この段階では実現できていなかった。

上井覚兼がまとめた日向衆の武士たちは島津氏直参で覚兼のもとに編成された衆中と、覚兼に仕えいわゆる陪臣にあたった内衆の「忰者」とがあった。忰者として確認できるのは上井玄蕃助と上井神次、加治木駿河守、加治木伊与介、安楽阿波介である〔桑波田1958〕。忰者は覚兼に近侍して親衛隊的な役割を負っており、職務から覚兼の館に近接して屋敷をもった可能性がある。

近年の調査で織田信長が居城にした愛知県小牧城山麓の信長の館に近接した屋敷群が検出されているが〔中嶋ほか2003〕、これら屋敷群は信長の親衛隊の屋敷群と見て間違いない。また愛媛県湯築城の調査では河野氏の居館がある曲輪内に館に近接した一群の屋敷群を検出しており〔中野ほか2002〕、これも大名の直属家臣である親衛隊の集住の実態を示す資料である。いずれも大名の館に近くあって大きくない屋敷群という特徴をもった。

こうした各地の城郭の様相から考えて、宮崎城内でも城内衆の屋敷よりも小規模ではあっても覚兼の館に近接して設けられた忰者の屋敷があった可能性がある。ただしすべての忰者の屋敷が城内にあったのではないだろう。また基本的に忰者の屋敷は山麓にあり、主郭にあった覚兼の館に出仕して、交代しながら詰めていた可能性もある。いずれにせよどのような屋敷群が発掘で検出されるのか、期待して待ちたい。

さらに宮崎城の日常の警備がどうなっていたかも重要な問題である。島津氏の本拠鹿兒島は各地の衆中が組み合わされて輪番で警護を務めていた。こうしたことから宮崎城も宮崎衆中がいくつかの番を組んで輪番の守備をしていたことが考えられる。すると宮崎城内には単純に個々の屋敷地が集まっただけでなく、在番のための詰所が要所にあったはずである。おそらく防御の拠点になる出入り口や櫓の周囲を中心に詰所を配置していたのであろう。

(2) 主郭御殿

主郭には上井覚兼の御殿があり、政庁と居所として機能した。ここでは先に引用したように正月をはじめとして正式の対面を行っており、主殿に相当した建物があったことがわかる。しかし正式ではあっても形式的な対面ばかりではなく、室町・戦国期の権力には不可欠であった城主と家臣達との人格的で親密な人間関係の構築に覚兼も腐心していた。

覚兼は僧や城内之衆、忰者などと将棋や碁、双六、茶湯、蹴鞠を楽しみ、『太平記』などの戦記を若衆達に読み聞かせていた。若衆達も「終日」覚兼のもとを訪ねていて、覚兼を慕っていたようすがうかがわれる（天正13年5月：中巻229-230など）。また覚兼は親しい僧や城内之衆、忰者を招いて「月次連歌」を「愚亭」にて開催していた（天正13年6月：中巻232）。

こうした身分の上下を前面に押し出さずに人格的で親密な人間関係を築き、またさまざまな身分の人びとが集まって文芸活動を行うにふさわしい建物は会所空間であった。主殿とは別棟の会所空間を覚兼の主郭御殿が備えたことは確実である。

(3) 主郭の庭園

そしてこの会所空間に隣接して庭園を設けたことも日記からわかる。天正11年閏正月には庭づくりの記述が集中している（上巻：192-193）。「庭二樹なと植させ、石なとつかハせ申候也」（3日）、「庭前二木なとあまた栽させ候て見申候」（4日）、「又樹なと種々作候て慰候」（5日）とあるのがそれで、山城であることから庭園は枯山水だったと思われる。庭園はその後も手を入れて整備に努めたようで、天正13年には「庭二かかりの松なと植させ候」（正月17日：中巻168）、「懸之木栽させ見申候」（同18日：中巻168）とある。

会所機能を補完し、近世に向かって会所機能を継承したのものとして〔前川2002〕、茶室は当該期の城館を考える上で重要な位置を占める。茶室に関しては天正11年4月に吉日だということで「茶湯之座可構普請等させ」と見え（19日：上巻230）、さらに「茶湯座作候する覚悟之処二樹なとさせ候」（同月21日：上巻230）、「茶湯之座普請させ候て見申候」とつづいた（同月22日：上巻230）。

翌月には「此日より茶湯座造作企候、諸細工共させ候て見申候」とあることから内装の細工をはじめたことが判明する（5月13日：上巻236）。茶室まわりは天正13年に庭に手を入れたときにも整備を進めており、庭に「かかりの松」を植えたのにつづいて「茶湯之座見越二常磐木なと栽させ候て見申候也」（正月17日：中巻168）とある。

1583年（天正11）の日記だけで75回にもおよぶ茶会の記事があり、このうち宮崎城内では37回の茶会が開かれていた。いかに茶湯が流行していたかがよくわかる。覚兼もよい茶道具を収

集することに努めており、道具を鑑定してもらったり、あるいは自慢の道具を見せたりしている。城が遺跡化すると多くの茶道具は持ち出され、廃棄されたものも土中で滅失するものが少なくないが、それでも中世の城跡から天目碗などが数多く出土する背景をこうした茶湯の隆盛はよく物語る。

(4) 主郭の風呂

これら御殿の主要建物に加え、主郭に建っていたことが判明するのは風呂である。天正11正月に「風呂造作打立候也」とあり(30日：上巻191)、同年閏正月には「此日ハ風呂建させ候とて、終日普請させ候也」と記していた(18日：上巻196)。日記の中にはしばしば風呂を焚かせた記述がある。しかし風呂を焚いたのは純粹に体を清めるためだけではなく、対面や饗宴の一環として風呂に家臣や来訪者を入らせ、また覚兼自身も寺社などを訪問した際に、対面や接待の一環として風呂によばれていた。

こうした風呂をめぐる様相からは風呂をもつ者が限られたことを示しており、戦国期の武士の暮らしを考える上で興味深い。戦国期の城館内の風呂の発掘例には、吉川氏に関連した広島県の万徳院跡があり、現地には風呂を原寸大で立体復原している。これはいわゆる蒸し風呂型式であったが、宮崎城の主郭にあった風呂も同様のものと考えられる。

復原された万徳院の風呂に入った人によれば、蒸気と木の香りが渾然となってすばらしい癒し効果があるという。宮崎城ではすべてではないにせよ風呂を焚いた日や入った人がわかる希少な事例であり、発掘調査によって遺構が確認されることを心待ちにしたい。

(5) 主郭の毘沙門堂

主郭内にあった宗教施設が毘沙門堂であった。この毘沙門堂は茶室と同じ天正11年4月19日が吉日ということで工事を始め、同月23日条に覚兼が工事を監督した記事が見え、翌5月3日条に毘沙門像を奉安したことを記すので(上巻234)、半月あまりで完成したことがわかる。覚兼は後述するようにさまざまな神仏を信仰したが、とりわけ毘沙門天への信仰は厚かった。毘沙門堂完成直後の5月6日には「毘沙門堂二茶湯仕懸、衆中なとあまた寄合、終日慰候也」とあり、完成のお披露目をしている(上巻235)。

(6) 主郭の工房

主郭内には御殿があっただけでなく、工房を併設していたらしい。たとえば「恒如、此日も番匠、金細工、刀鞘細工、塗物師など、種々させ候て見申候、鉄放台就中拙者見候て、申付候也」といった記述があり(天正11年6月14日：上巻248)、覚兼に直属した職人の工房が御殿に近接してあったとしか考えられない。青森県の根城ではそうした主郭内の工房が発掘で判明しており、宮崎城でも同様の様相を想定すべきだと思われる。

(7) 主郭の建物配置

主郭内の主要建物群の配置関係をうかがわせるのが天正11年2月14日の記述で、主郭に比定

できる「内城」に招いた賓客とまず「御礼茶」があり、ついで「御めし」となった。時間がたつてから場所を移して「奥座」にて押物と思われる「押肴にて御酒」となり、最後はさらに場所を移して「茶湯之座にて点心参候て、御酒数篇参候、御茶勿論候」となった（上巻：203-204）。

おそらく最初の「御礼茶」と「御めし」が主殿空間での正式な対面と饗宴であり、「奥座」での「押肴にて御酒」が「内」懸御目」とある様相からも会所空間での人格的な饗宴と位置づけられる。こうした主殿と会所とを使い分けた室町期の武家儀礼に則った対面と饗宴に、茶室でのさらに親密で個人的な饗宴が加わったのであった。

儀礼の進行につれてそれぞれの建物や部屋を使い分けており、移動もスムーズだったことがわかる。これらから主殿空間、会所空間、茶室といった建物群を廊下で結んだ御殿群を想定することができる。会所空間は「奥座」とあるように、御殿群の中では内向きにあったこと、おそらく会所空間と茶室は近接したであろうことが推測できる。覚兼は立花の名人であり、会所空間や茶室は室礼に則ってみごとに飾り付けられていたに違いない。

(8) 弓場

武士にとって武芸の鍛錬を怠ることはできなかった。『上井覚兼日記』には宮崎城の弓場が登場した。たとえば「弓場普請各衆へさせ申候也」（天正11年5月8日：上巻235）とあるのをはじめに、「朝普請二、坪弓場誘させ候也（中略）拙者手之衆共、坪弓場にて弓之事仕候、見申慰候」とある（同月10日：上巻236）。さらに普請の記述は翌11日にも見え、その翌日である12日と18日には、体調を崩していた覚兼は乗物に乗って麓に下り、弓場普請の進捗状況を確認した（天正11年5月12日および18日：上巻236・237）。

この記述から弓場は山麓にあったことが確認できる。そして同年6月14日の記述には「暮候て弓場より帰候也」とあり（上巻250）、弓場が主郭へ登っていく城道の道筋のそばに位置したことがうかがえる。そして同年6月25日の記述には「目曳口弓場」と見えるから（上巻254）、この弓場は宮崎城西側の山麓に位置したことが確定する。目曳口は宮崎城主郭の北側堀切りに到達した城道であり、6月14日の記述ともよく符合する。山麓部で弓場の痕跡を探る踏査は行っていないが、何らかの遺構を確認できる可能性がある。

(9) 草払い

春から夏にかけては草木が茂る。宮崎城のような山城では草払いはたいへんな問題であったに違いない。特に塁線周辺は見通しをよくし、鉄砲や矢が通るようにしていたから、草もよく生えたに違いない。草が茂ることは迷惑なことばかりではなく、切岸の土砂流失を防ぐことでもあったから、適切に管理することが重要であった。天正13年7月には「城之草払させ候て見申候、岸切せ候処も候」とあり、翌日も「此日も草払い、昨日一日にハ不事成候間」と2日ばかりで除草をしていた（18日・19日：中巻247）。

除草をして曲輪の切岸の状況が明らかになることで、防御上の弱点や塁線の傷みも点検できたようで、部分的に切岸を整えたことが記述からわかる。

(10) 道の整備

宮崎城の南西の大淀川北岸に位置した柏田は、宮崎城にとって大淀川の水運を押さえた軍事的、経済的に重要な拠点であった。覚兼も柏田まで船を用いて騎乗することもしばしばあった。そこで城と柏田との間に新たな道をつくって整備し、連絡を速やかにしていた(天正11年閏正月21日・27日：上巻196・198)。

(11) 犬馬場

『上井覚兼日記』には犬追物の記述も多い。日記の中では宮崎城下での犬追物の開催は確認できないが、『伊勢守心得書』は覚兼が犬追物の参仕を固辞して島津義久の不興をこうむったことを記した。犬追物は武家儀礼として重要であるばかりでなく、家臣の務めでもあった。

宮崎城の西側の谷筋に現在でも犬馬場の通称地名があり、宮崎城が犬馬場を備えたことがわかる。第2次世界大戦の直後にアメリカ軍が撮影した航空写真の実体視を行ったが、馬場の痕跡は確認できなかった。犬馬場の位置は、柏田の北で岩戸社の西側あたりであったらしい。

註(1) ソフトはカシミール3D, Ver7.7ソフトを用い、計算範囲を半径22kmとしてシミュレーションした。ベースマップは国土地理院の数値地図を用いた。宮崎城内に3つのポイントを設定して可視範囲を合成した。

【参考文献】

- 桑波田 興 1958「戦国大名島津氏の軍事組織について」『九州史学』第10号(福島金治編『島津氏の研究』戦国大名論集16、吉川弘文館、1983年に再録)
- 千田 嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会。
2003「南九州における戦国期権力と城」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 集。
- 中嶋 隆・坪井 裕司・浅野 友昭
2003『史跡小牧山旧小牧中学校用地発掘調査概要報告書(3)』小牧市教育委員会
- 中野 良一・沖野 新一・柴田 圭子
2000『湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財センター。
- 前川 要 2002「天主の成立と中世的儀礼観念の崩壊」千田嘉博・小島道裕編『天下統一と城』塙書房

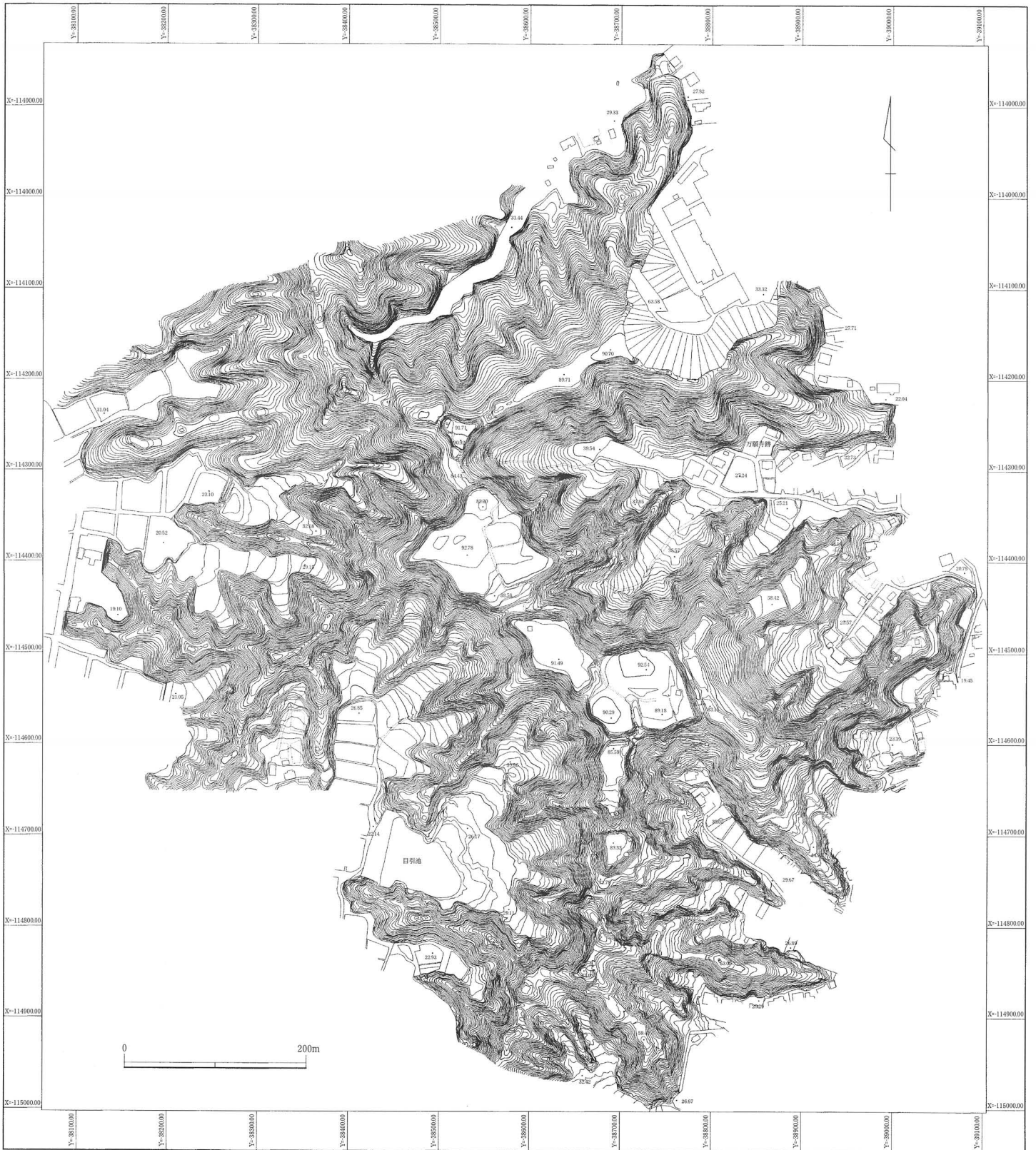
謝辞

宮崎市教育委員会文化振興課の方々には現地踏査や資料に関して懇切な助言を賜り、また宮崎城保存会の皆様には、踏査に際してご助力と教示を賜った。心から御礼申し上げたい。

第V章 宮崎城の現況

宮崎城は、最高点標高93m、山麓との比高差70mで、城域面積は尾根上の曲輪部分で10万㎡、山裾まで含めると50万㎡になる。城の築かれた主尾根の周囲には、大小多数の尾根が発達し、山麓には複数の迫が形成されている。尾根上の曲輪は、南九州の拠点的城郭に見られる複数の曲輪が並列した「連郭式城郭」「館屋敷型城郭」と呼ばれる構造である。南九州におけるこのような城郭は、低平なシラス（火山灰）台地が発達するというこの地の地質的条件と、当地における戦国大名家組織内の分立的な権力構造を表出したものという2つをもって語られるが、宮崎城の築城された丘陵は、土木工事の容易な軟質のシラス土壌ではなく、多く礫層が露出した、ごく一般的な山であり、この地に館屋敷型城郭を現出させることは、並々ならぬ苦勞を伴ったものと思われる。

中心となる曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸは、上部平坦面を取り巻く斜面の傾斜角が急で、斜面下半との差異が等高線上も明瞭に表れており、切岸が顕著である。主郭と考えられる曲輪Ⅰは、地形測量においても曲輪内に明確な段差や溝等による区画は見出せず、単郭の曲輪と見て間違いはない。前章に指摘のあった曲輪ⅡaとⅡbを画する堀は、曲輪ⅠとⅡの連絡のみならず、大手から主郭への導入として重要な部分であるが、等高線上は表れていない。今後、灌木等伐採ののち、精査する必要がある。曲輪の外に大規模な土塁が張り出す曲輪Ⅱ南端の大手口の導入は、土塁を回り込んだ後、更に曲輪Ⅱaを回り込む、くい違い虎口である。千田嘉博氏による分類の第3類型にあたると思われる、その使用は1567～1575年とされている(千田2000)。宮崎城を巡る歴史の中では、日向の支配権が伊東氏から島津氏へ移る契機となった1572年の木崎原の合戦の前後にあたる。無論、畿内を中心とした織豊系城郭の年代観を、そのまま南九州の城郭に当てはめるのは危険であろうが、伊東氏領有の末期もしくは島津氏領有の初期と考える分に間違いはなかろう。また、曲輪ⅡbとⅡdの区画線の延長で、現在、電力鉄塔保全用の道が曲輪Ⅳへと連絡している。あるいは城郭時代から踏襲されたものかもしれない。曲輪Ⅴ南西斜面の豎堀について、前章において戦時中のものである可能性を指摘しているが、宮崎城では、他に豎堀がなく、城郭時代のものとしては、確かに不自然である。中心となる曲輪群から外れた曲輪Ⅳ・Ⅶ・Ⅹは切岸が明瞭ではなく、また前章に指摘のとおり、曲輪面の整地が顕著ではない。現況で、宮崎城の南北端の曲輪となっている曲輪Ⅹ以北の尾根上、曲輪Ⅶ以南の尾根上においても、複数の堀割りや曲輪が確認されているが、これらも同じく切岸や曲輪平坦面の整地が不鮮明である。北側においては曲輪Ⅹを尾根上に約500m北上した地点に大型の堀切りと土塁があり、あるいは宮崎城の北端を画する遺構かとも思われる。南側も同じく曲輪Ⅶから尾根上を約500m南下した地点まで曲輪、堀切りが続くが、以南は団地として削平されており、明確な収束地点は不明である。これら中心となる曲輪群をはずれて尾根上に配置された遺構群は、凝集度が低く、尾根上の要所のみ配置されている。これら外縁部の曲輪群は前章に指摘のとおり、臨時・仮設的な曲輪の可能性が高いが、一時的なものとするには大規模な堀切りもあり、恒常的な施設とも



第7図 宮崎城現況地形測量図

考えられる。また宮崎城自体が南北朝期から江戸初期の長期にわたり、利用、成長を続けてきた城郭である。現在の宮崎城の姿は、多くは伊東時代の末から島津時代にかけて完成された姿かと思われるが、これら周縁部曲輪の遺構のあり方は、拠点的ではない中世山城に良く見られるものでもあり、あるいは宮崎城初期の遺構の可能性もある。今後、これらと宮崎城との関連性は、慎重に検討する必要がある。

近世初期において城郭としての役割を終えたのち、広大な平坦面を持つ曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅸは、近年まで畑地として利用されてきた。現在は畑地としての利用はなく、杉林や雑木林、荒蕪地となっている。また曲輪Ⅰ北西端と曲輪Ⅱ東端に電力供給用の鉄塔が建設され、曲輪Ⅸの北東斜面は、近年の山麓における病院建設に伴い、広範囲に渡って大きく削平されている。このように、各所において開発による破壊が行われているものの、古くより地域の人々に城として認識され、保護されてきた。曲輪Ⅷには石碑（「三界萬霊」「宮崎城三百五十年」「宮崎城四百年」）が建てられているとともにベンチが設置され、登城路の整備や案内板、曲輪Ⅰにおける「本丸城跡」の標柱、登城口における門の設置など、熱心な顕彰活動が行われている。

【参考文献】

千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』株式会社新人物往来社

千田 嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやぎきじょうあとそくりょうちょうさほうこくしょ							
書名	宮崎城跡測量調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第75集							
編集者名	竹中 克繁							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 25-2111							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮崎城跡	宮崎県宮崎市 池内町	45201	21-085	31 58 8 付近	131 24 27 付近	平成12年度 ～ 平成19年度	100,000	重要遺跡確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮崎城跡	城館跡	中世	城郭	—		保存状態の良い南九州の拠点 城郭		

宮崎市文化財調査報告書 第75集

**宮崎城跡
測量調査報告書**

2008年3月

発 行 宮崎市教育委員会